

新町遺跡

—福岡県糸島郡志摩町所在墳墓群の調査—

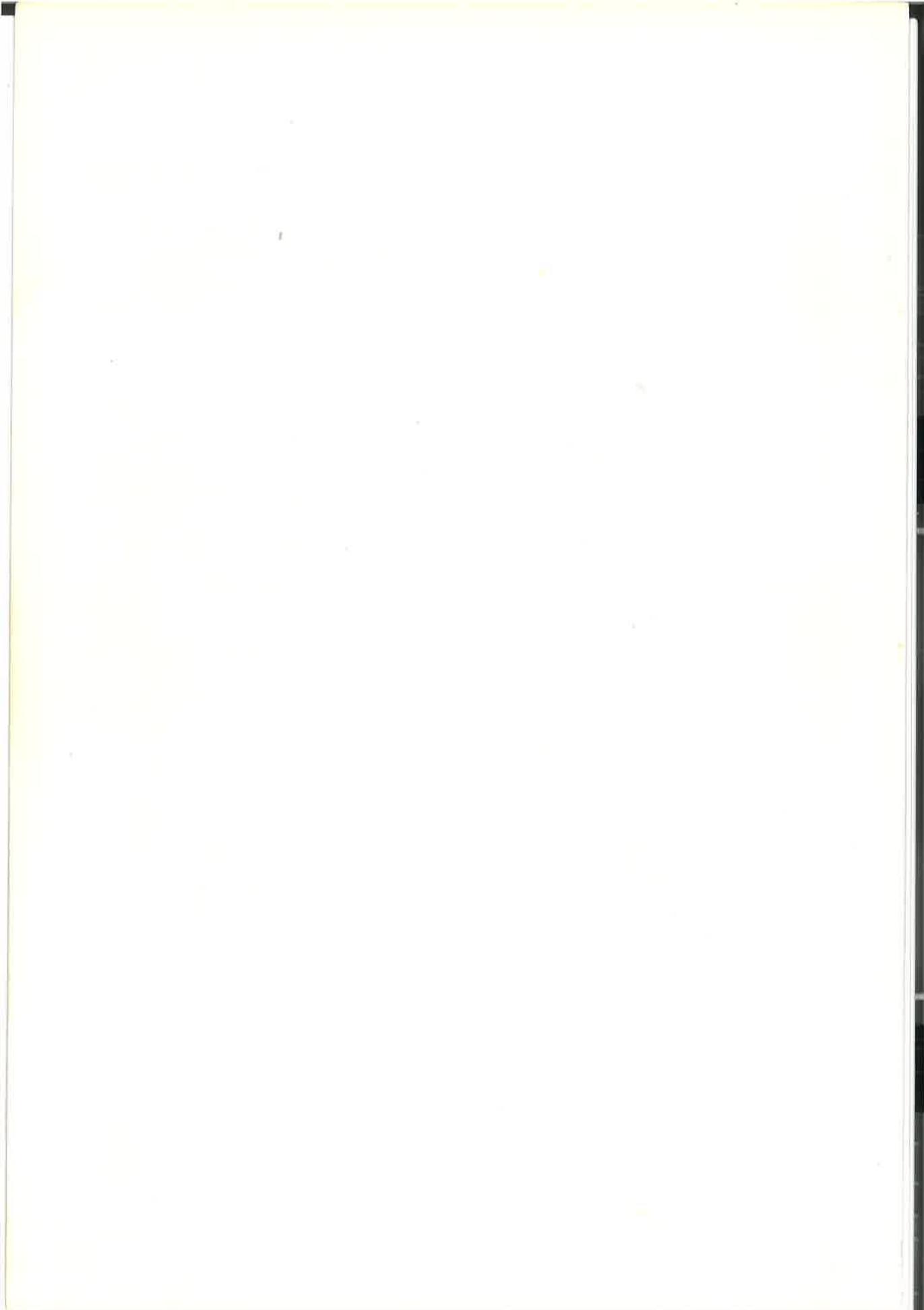
III

志摩町文化財調査報告書

第 10 集

1990

志摩町教育委員会







新町遺跡

—福岡県糸島郡志摩町所在墳墓群の調査—

III

志摩町文化財調査報告書

第 10 集



序 文

新町遺跡は、過去2回の発掘調査で諸学間に新しい問題を投げかけてきました。弥生早期から中期までの支石墓や甕棺墓・土壙墓をはじめ、出土した遺物や人骨は日本国内のみならず東アジア的視野においても議論されるべきものと思われます。

今回は個人住宅建設に伴う事前調査として、ひきつづき墓域部分を発掘しました。その結果、弥生時代末から古墳時代前期にかけての甕棺墓・石棺墓等が新たに検出され、新町遺跡の時期は拡大し、当遺跡の重要性も一段と増すこととなりました。

このように貴重な資料を提供してくれる新町遺跡を一日も早く保存整備し、文化普及および研究資料として幅広く活用していく事こそ、今後の私たちの課題だと思います。

なお、当調査において各方面から指導・助言をいただいた諸先生方、調査を担当された福岡教育事務所の小池史哲氏、区長・地権者をはじめとする地元新町関係各位の絶大なるご協力を得て、無事調査を完了できたことに対し、心から感謝申しあげ序といたします。

平成2年3月31日

志摩町教育委員会

教育長 矢野 節雄

例　　言

1. この報告書は、志摩町教育委員会が国庫補助を受けて実施した、同町所在新町遺跡の重要遺跡確認調査の第3次調査の記録である。
2. 出土赤色顔料については福岡市埋蔵文化財センターの本田光子・宮内庁正倉院事務所の成瀬正和に鑑定をお願いした。
3. 遺構の実測は小池史哲・洞龍二郎・岡部裕俊・角浩行が、遺物の実測は小池・若松美枝子・佐藤みゆきが行ない、製図は小池・豊福弥生が行なった。遺構の写真撮影は小池が行ない、空中写真は「空中写真企画」に委託した。遺物の写真撮影は九州歴史資料館の石丸洋が行なった。
4. 金属器の保存処置は九州歴史資料館の横田義章が行なった。
5. 土器の復原作業は岩瀬正信の指導のもとに九州歴史資料館で行なった。
6. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I 小池 史哲
II 小池 史哲
III 本田 光子・成瀬 正和
IV 小池 史哲

7. 本書の編集は小池が行なった。

本　文　目　次

I. はじめに.....	1
II. 調査の内容.....	4
1. III-1 地点の調査	6
1) 遺構とその遺物.....	6
2) 包含層出土遺物.....	25
2. 簡易水道工事出土遺物.....	33
III. 出土赤色顔料の分析調査.....	38
IV. おわりに.....	39

図 版 目 次

卷頭図版	a 新町遺跡III-1 地点全景	
	b 1号甕棺墓	
図 版 1	a 新町遺跡俯瞰 (西側より、引津湖を望む)	b 6号石棺墓
	b III-1 地点全景空中写真	c 蓋石除去後の 6号石棺墓
2 a	1号石棺墓	7 a 7号石棺墓
	b 蓋石除去後の 1号石棺墓	b 蓋石除去後の 7号石棺墓
	c 2号石棺墓	c 1号甕棺墓
3 a	蓋石除去後の 2号石棺墓	8 a 2号甕棺墓
	b 3号石棺墓	b 3号土壙
	c 蓋石除去後の 3号石棺墓	c 4号土壙
4 a	4号石棺墓の標石	d 馬の歯牙出土状況
	b 4号石棺墓	9 a 石棺墓・甕棺墓出土遺物
	c 蓋石除去後の 4号石棺墓	b 1号甕棺
5 a	5号石棺墓の標石	10 a 2号甕棺
	b 5号石棺墓と銅鏡出土状況	b 包含層出土土器
	c 蓋石除去後の 5号石棺墓	11 a 包含層出土土器・石製品
6 a	6号石棺墓の標石	12 包含層出土石器・鉄器・土製品、簡易水道工事出土土器

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図 (1/75,000)	2
第 2 図	遺跡周辺地形図 (1/5,000)	4
第 3 図	遺跡地形図 (1/600)	折込み
第 4 図	III-1 地点遺構配置図 (1/50)	折込み
第 5 図	III-1 地点土層図 (1/60)	5
第 6 図	1・2号石棺墓実測図 (1/30)	7
第 7 図	1号石棺墓墓壙内出土土器実測図 (1/3)	8
第 8 図	3号石棺墓実測図 (1/30)	10
第 9 図	4号石棺墓実測図 (1/30)	11

第 10 図	4 号石棺墓墓壙内出土土器実測図 (1/3)	12
第 11 図	4 号石棺墓墓壙外出土鐵器実測図 (1/2)	12
第 12 図	5 号石棺墓実測図 (1/30)	14
第 13 図	5 号石棺墓墓壙内出土銅鏡実測図 (1/2)	14
第 14 図	5 号石棺墓墓壙外出出土土器実測図 (1/3)	14
第 15 図	6 号石棺墓標石実測図 (1/30)	15
第 16 図	6 号石棺墓実測図 (1/30)	16
第 17 図	6 号石棺墓墓壙外出出土土器実測図 (1/3)	17
第 18 図	7 号石棺墓実測図 (1/30)	18
第 19 図	7 号石棺墓棺内出土鐵器実測図 (1/2)	19
第 20 図	1・2 号甕棺墓実測図 (1/20)	20
第 21 図	1 号甕棺墓実測図 (1/6)	21
第 22 図	2 号甕棺墓実測図 (1/6)	22
第 23 図	2 号甕棺墓墓壙出土鐵器実測図 (1/2)	22
第 24 図	1・2・4・5 号土壙実測図 (1/30)	23
第 25 図	1～5 号土壙出土土器実測図 (1/3)	24
第 26 図	包含層出土土器実測図 1 (1/3)	27
第 27 図	包含層出土土器実測図 2 (1/6)	28
第 28 図	包含層出土土器実測図 3 (1/3)	29
第 29 図	包含層出土石製品実測図 (1/2)	30
第 30 図	包含層出土石器・土製品実測図 (1/3)	31
第 31 図	包含層出土鐵器実測図 (1/2)	32
第 32 図	簡易水道工事出土土器実測図 1 (1/4)	34
第 33 図	簡易水道工事出土土器実測図 2 (1/4)	35
第 34 図	簡易水道工事出土土器実測図 3 (1/6・1/3)	37

表 目 次

表 1	1 号石棺墓出土ガラス小玉一覧表	8
表 2	3 号石棺墓出土ガラス小玉一覧表	10
表 3	6 号石棺墓出土ガラス小玉一覧表	17



新町遺跡III—1 地点全景



1号甕棺墓

I. はじめに

新町遺跡は福岡県糸島郡志摩町大字新町字ギ丁原に所在する。この遺跡は九州大学医学部病理学教室教授であった中山平次郎によって学会に紹介され（註1）、大正時代からひろく全国に知られるところであった。大字新町字ギ丁原71番地の畠には支石墓の上石とみられる大石が露出していて、この畠地に住宅建設が計画されたことが契機となって、昭和61・62年度に重要遺跡確認調査として、志摩町が国庫補助を受けて発掘調査を実施している。

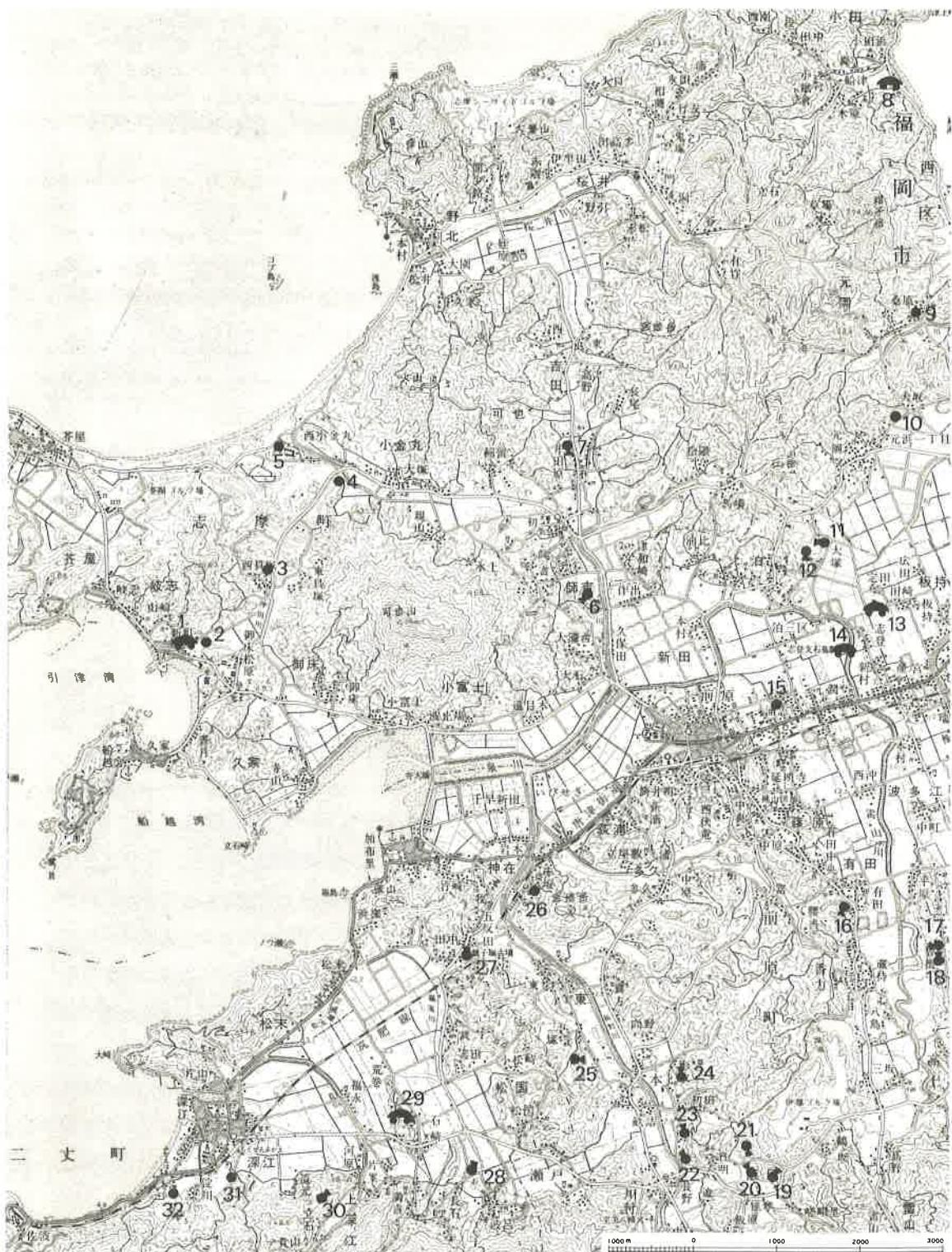
昭和61年度の第1次調査では、弥生時代早期・前期の支石墓を含む57基の墳墓を検出し、そのうちの一部を発掘してこの時期のものとしてはじめてといえる埋葬人骨を得るなどの成果を得た。また、早期と前期の墓域の区分と広がりが推定されるとともに、第2地点で古墳時代前期の箱式石棺墓・土壙墓各1基が検出され、貨泉も出土した（註2）。

昭和62年度の第2調査では、字ギ丁原の砂丘上に13ヶ所のトレーナーを設定して墓域の範囲確認がなされている。この結果、砂丘の頂部より北側で墳墓が営まれ、第1地点の弥生早期の墳墓群の形成に始まり時期を追うごとに次第に東側へ移動して中期後半までには確実に東側に変遷している様子が理解できたのである（註3）。

このように新町遺跡が、弥生時代墳墓群として重要な遺跡であることは明らかとなったが、字ギ丁原73番地の畠地に住宅が建設される計画が起こった。この住宅建設計画は当初75番地に計画されたもので、昭和28年に甕棺が出土したと伝えられている地点の南に隣接していて、第1次調査時に第2地点として発掘調査した。この調査では古墳時代前期の石棺墓・土壙墓が発見されたが、南側は既に砂取りで深く地下げが行われてバイラン土と入替えられていた。新たな住宅建設計画は75番地の南側半分とその東側の畠地にまたがる形に変更されたものである。なお、この南側は第4地点として調査して古式土師器・弥生後期土器を出土するものの薬瓶などの投げ込まれた攪乱穴が多い状況で、東側も第3地点として調査して地表から160cmまで掘り下げたが遺構は確認されていない。

しかし、このような周囲の状況でも、73番地の畠地が墳墓群に含まれる可能性は完全に払拭することはできないので、地権者の承諾を得て第3次調査として発掘調査することにした。調査は平成元年6月12日から7月6日までの期間で行なった。調査範囲は砂地であるために制約を受けて、住宅基礎の範囲内にとどまらざるを得なかった。

また、新町地内では簡易水道施設工事が実施されることになり、字ギ丁原の砂丘上を東西方向にはしり第1地点南側に接する町道に水道管を埋設する計画であった。この道路敷は墳墓群内を横断するもので道路敷下に支石墓上石や甕棺墓出土が伝えられているため、町水道課と教



第1図 遺跡位置図 (縮尺1/7,500)

1. 新町遺跡
2. 御床松原
3. 八遺熊跡
4. 熊添遺跡
5. 大牟田遺跡
6. 稲葉遺跡
7. 開1号墳
8. 小田支石墓
9. 桑原飛櫛貝塚
10. 瓜生(尾)貝塚
11. 泊大塚古墳
12. 御道具山古墳
13. 志登神社支石墓
14. 志登支石墓群
15. 浦志遺跡
16. 有田1号墳
17. 先山古墳
18. ワレ塚古墳
19. 日明17号墳
20. 日明16号墳
21. 日明13号墳
22. 日明3号墳
23. 日明11号墳
24. 横枕古墳
25. 東二塚古墳
26. 釜塚古墳
27. 銚子塚古墳
28. 長石二塚古墳
29. 曲り田遺跡
30. 德正寺古墳
31. 塚田遺跡
32. 鎮懸石八幡裏古墳

育委員会の間で協議し、第4地点南側の町道敷を利用する計画に変更された。さらに工事実施にあたっては教育委員会職員と連絡を取りながら慎重な工事を実施し、出来るかぎり立会いをすることとした。しかし、町教育委員会職員は国体準備などの職務もうけもっており、工事工程との調整や立会いを恒常的に行なうことが困難であり、工事の際に出土した遺物を採集する程度にとどまった。

平成元年度の調査は志摩町が事業主体となり経費を負担し、福岡県教育庁福岡教育事務所から調査担当職員を派遣して行なわれた。調査組織は下記のとおりである。

調査組織

総括	志摩町教育委員会	教育長	矢野 節雄
		教育課長	吉村 啓助
庶務		社会教育係長	青木 正美
		主事	岡崎みどり
調査・庶務		社会教育主事	洞 龍二郎
調査担当	福岡県教育庁福岡教育事務所		
	社会教育課	技術主査	小池 史哲

また、調査中の休日に、前原町教育委員会文化課林覚・岡部裕俊・角浩行の各氏には、多忙ななか遺構実測に手をわざらわせていただいた。

なお、区長はじめ新町地区の方々の他、地元の方々には、発掘調査に参加され、また諸々の御協力をいただいた。感謝の念に耐えない。

註1 中山平次郎 1917 九州北部に於ける先史原史中間期間の遺物に就いて— 考古学雑誌7-10
中山平次郎 1932 福岡地方に分布せる二系統の弥生式土器 考古学雑誌22-6

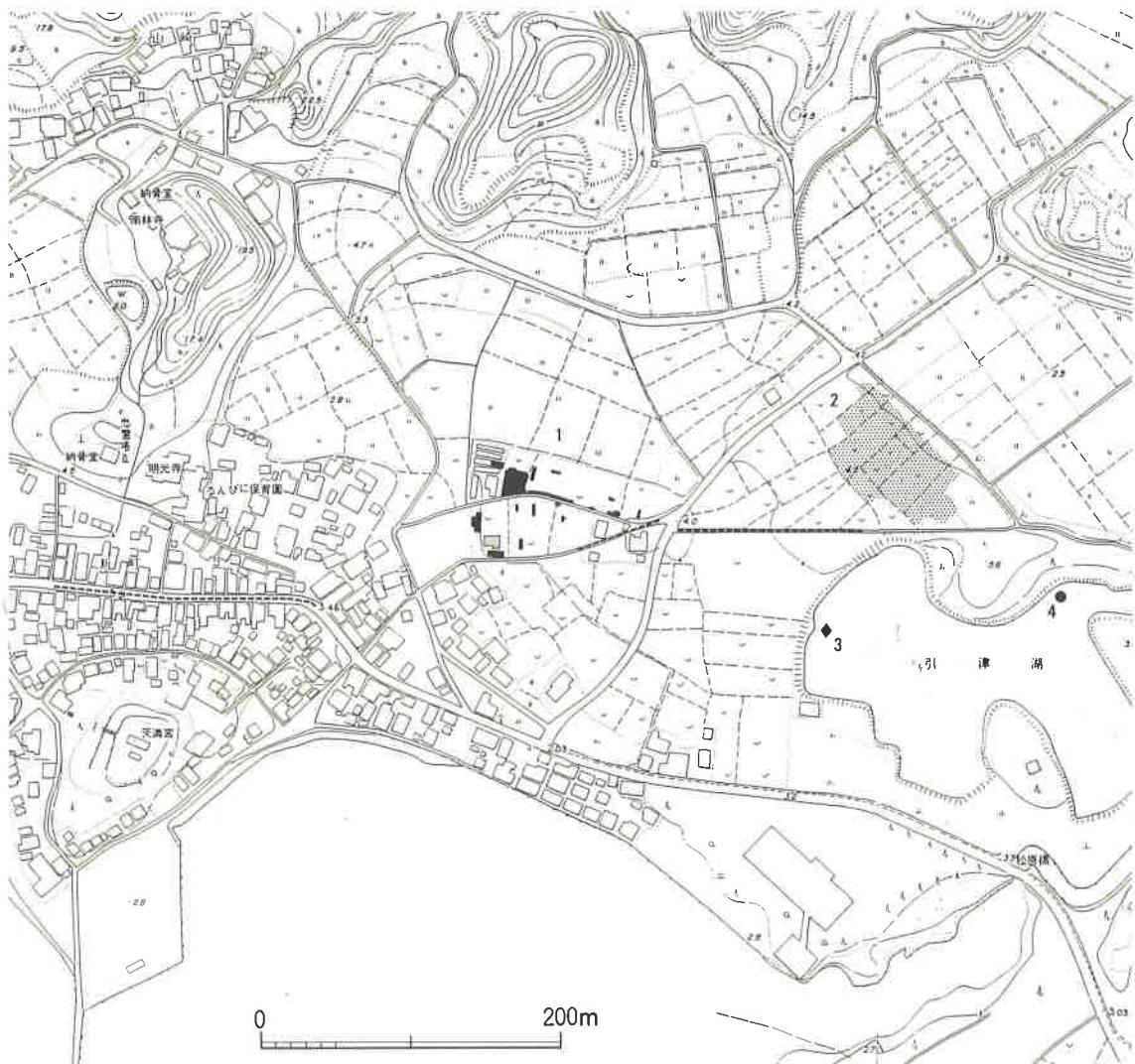
2 志摩町教育委員会 1987 新町遺跡—福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査—
志摩町文化財調査報告書第7集

3 志摩町教育委員会 1988 新町遺跡—福岡県糸島郡志摩町所在墳墓群の調査—
志摩町文化財調査報告書第8集

II. 調査の内容

第3次調査では、住宅建設に伴う事前発掘調査としてⅢ-1地点を全面発掘調査することにしたが、種々の制限があり敷地のうち住宅基礎の範囲より調査区を拡張しえなかった。

また、新町地内の道路敷に水道管を埋設される簡易水道工事が実施された折に、出土した遺物についてもこの項で報告する。

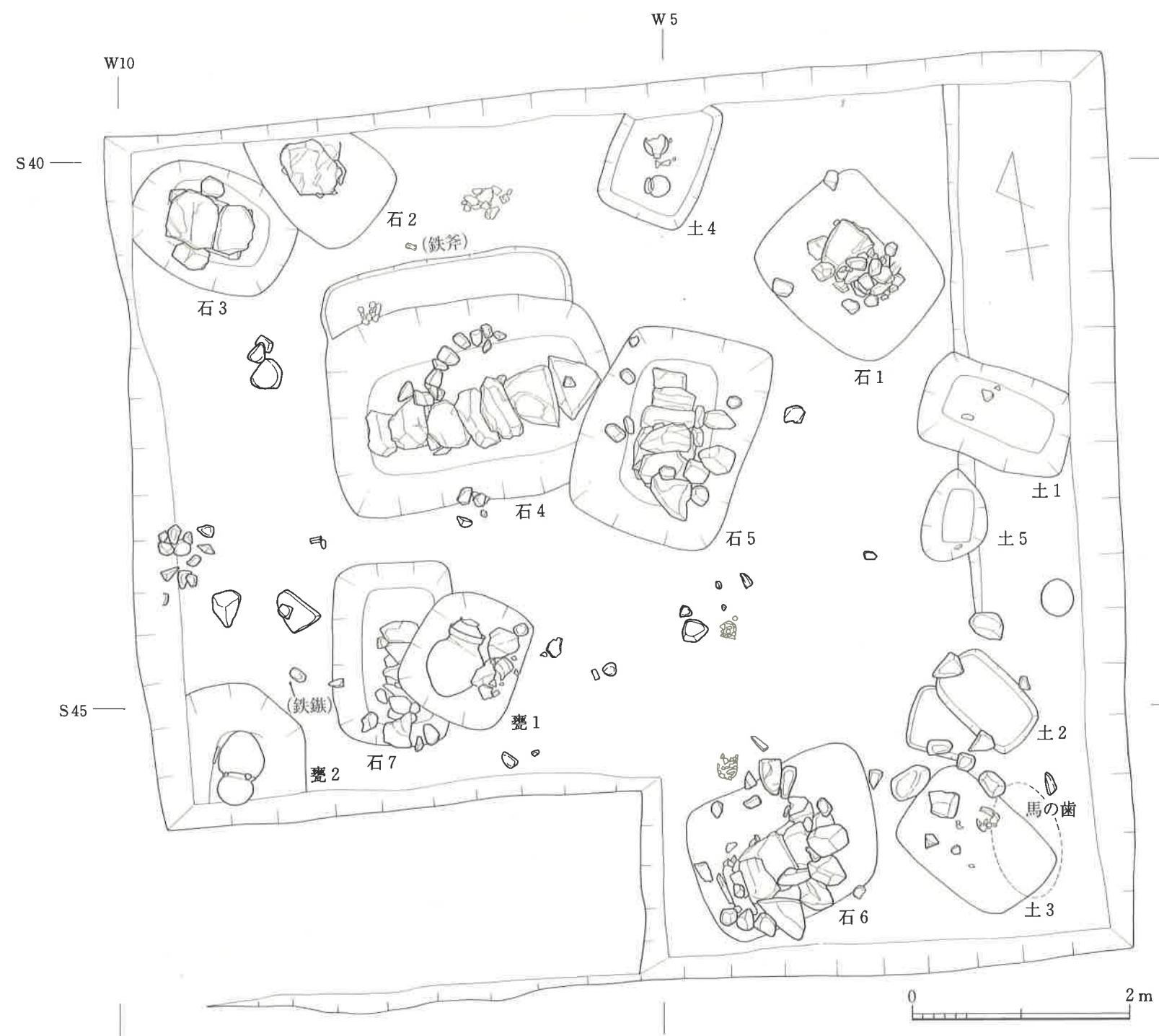


第2図 遺跡付近地形図 (1/5000)

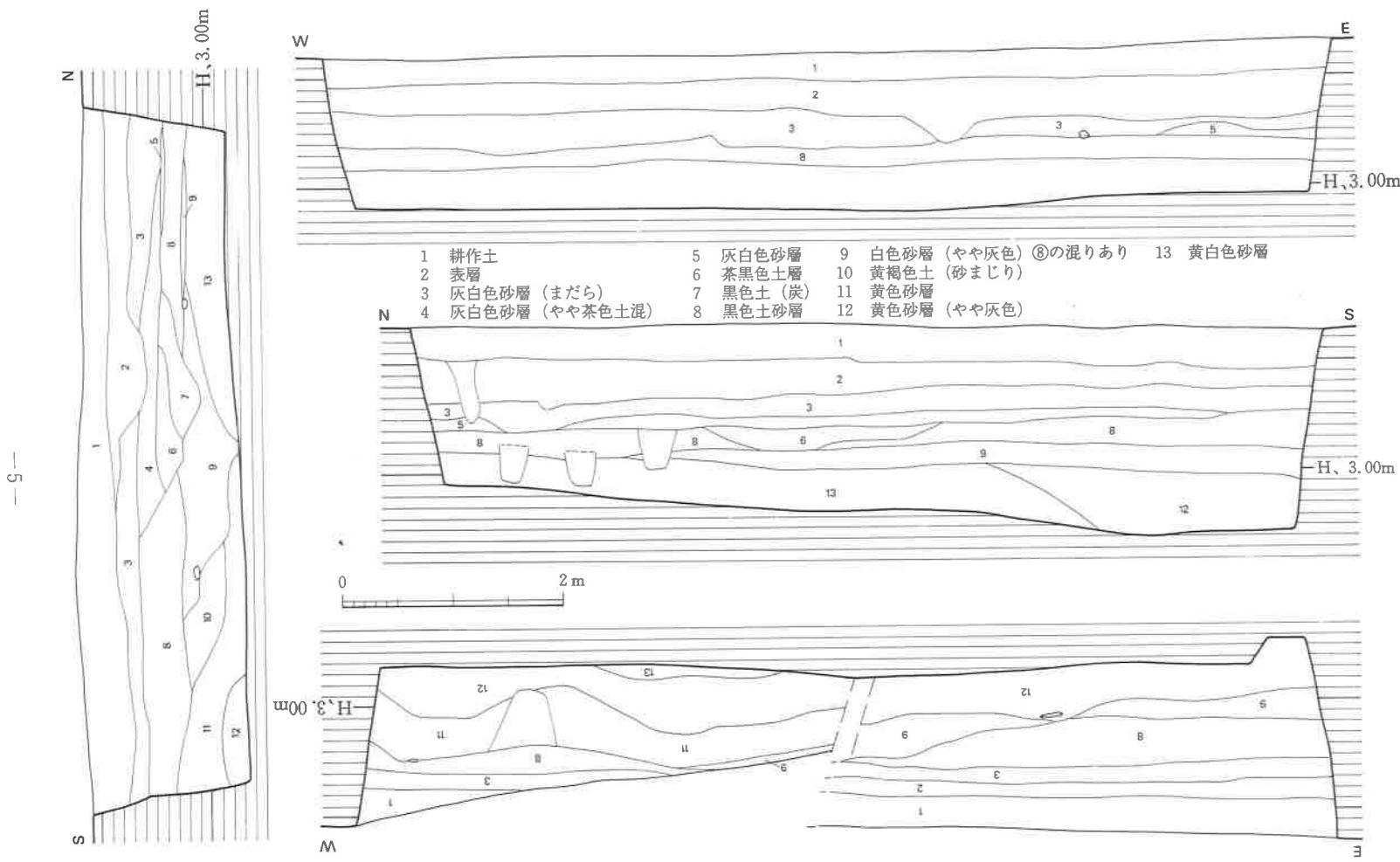
-----水道工事遺物出土区域

1. 新町遺跡 (黒---第1次・第2次、■第3次) 2. 御床松原遺跡
3. 鉄戈出土推定地 (昭和38年) 4. 貨泉出土推定地 (大正6年)





第4図 III-1 地点遺構配置図 (1/50)



第5図 III-1 地点土層図 (1/60)

1. III-1 地点の調査

1) 遺構とその遺物

III-1 地点では、箱式石棺墓 7 基、甕棺墓 2 基、土壙 5 基を検出した。表土の耕作土は 20~30cm の厚みがあり、この下に淡く黄色味を帯びた灰白色の単純砂層（第 1 層）、攪乱状を呈するが茶褐色・暗灰色を帯びる白色砂の層（第 2 層）、灰白色砂で薄く暗灰色などの黒っぽい砂層を互層状に挟んだりする層（第 3 層）、黄色味を帯びた砂層（第 4 層）と続き、石棺墓などの遺構は地表下 80~100cm の第 4 層中で検出した。おそらく第 3 層の上面に旧表土があったのであろう。

1 号石棺墓（図版 2-a・b、第 6 図）

調査区北東隅部の、地表下約 1 m の深さで検出した。

石棺墓は、長さ 1.60m、幅 1.35m、深さ 0.30m の隅丸長方形の墓壙内に構築されているが、石棺墓蓋石が露呈する深さでは墓壙プランの検出は困難で、蓋石より 20~30cm 下がった面でプランを検出した。石棺に使用される石材には、花崗岩や花崗閃緑岩・玄武岩・砂岩質の円礫がみられる。

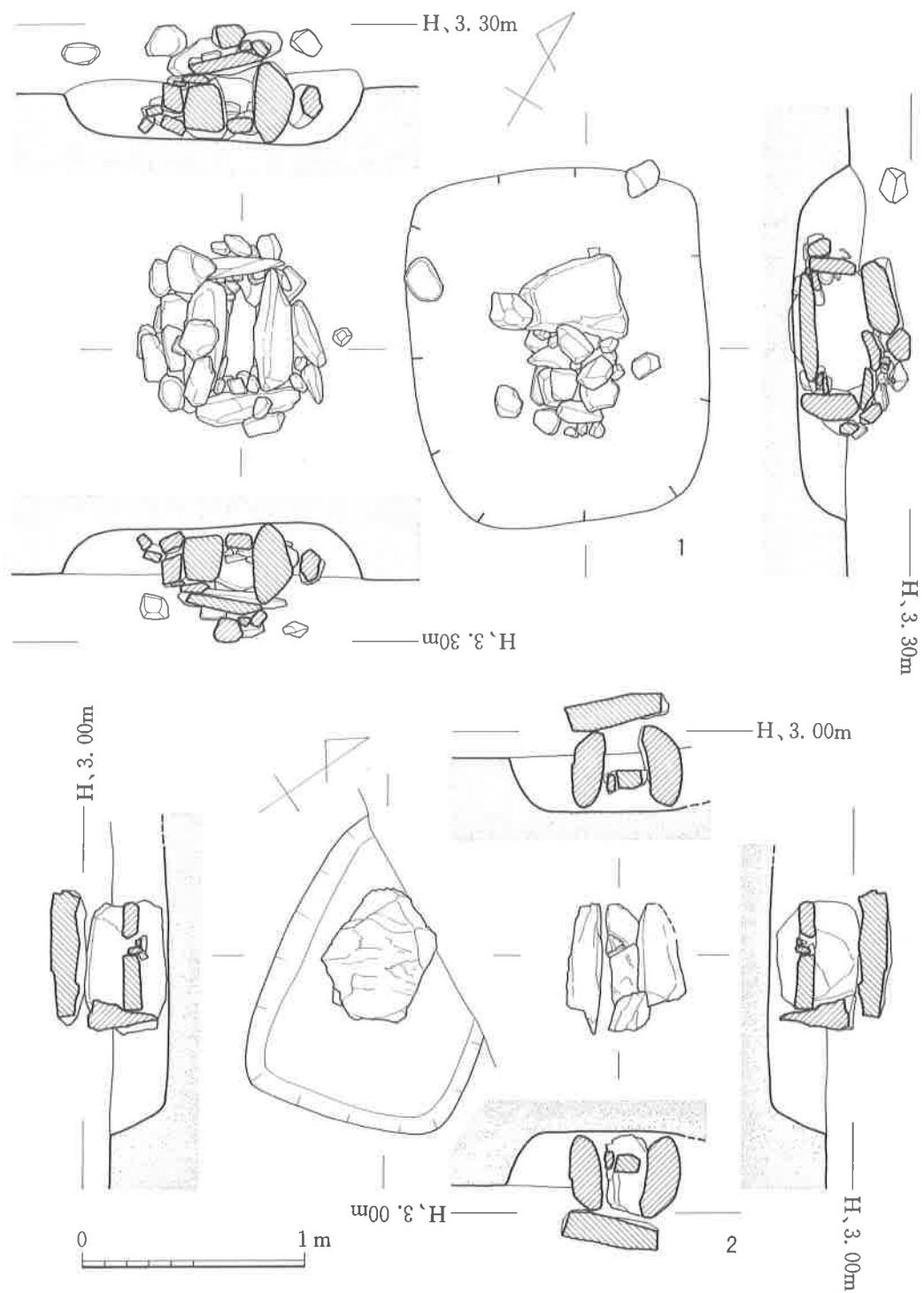
棺の内法は、長さ 55cm、幅 12~22cm、深さ 20cm を測り、主軸方位は N30°W をとる。棺内がわずかに幅広になり、小口に使用される石が大きめである南東側が頭位と推定されるが、蓋石では北西側に大振りの石が、南東側は小振りの石が被せられていて、にわかには決め難い。

棺の構築は、長さ 52cm、幅 13cm、厚さ 8cm の床石を、15~18cm の厚さをもつ両側板石が挟み、さらに側板石よりやや薄い石の両小口石が両側石を挟む形に組合わされて、倒れないように約 20 個の小振りの石で外側を支えている。河原石のような円礫を用いた棺は、床石・両側板石・小口石の接する四隅の部分に隙間を生じるために、棺内の四隅には小さな礫を充填しているが、粘土などの使用の痕跡はみとめられない。

蓋石は、小口石より大きな石を被せるが、北西側に長さ 50cm、幅 35cm、厚さ 14cm の、南東側には長さ 40cm 前後、幅 20cm 前後、厚さ 6~7cm の扁平な石を被せて、さらにその上に小振りな礫を 10 個ほど乗せて隙間を塞いでいる。なお、蓋石にも日張り粘土などの痕跡はみとめられなかった。

棺内からは、ガラス小玉が約 80 個出土したが、大半は床石面よりも床石隙間や床石下から出土しており、棺内からこぼれ落ちたものと推定される。

墓壙内からは北側小口に接して、弥生土器片が 1 点出土した以外遺物の出土はみられない。



第6図 1・2号石棺墓実測図 (1/30)

出土遺物

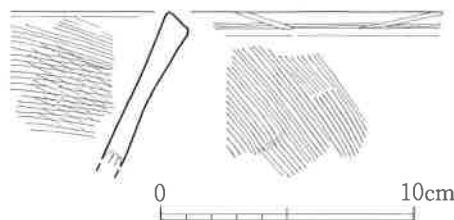
ガラス小玉 (図版 9-a、表 1) 外径・厚さが2.0mm前後から4.0mm程度の大きさで、コバルトブルーと暗いコバルトブルーの色調を呈する。計測可能なものが77点あり、破片で計測不能なものが約8点分程度ある。

表 1 1号石棺墓出土ガラス小玉一覧表

(単位: mm)

番	厚さ	孔 径	色 調	径	厚さ	孔 径	色 調		
1	3.4~3.8	2.1	1.6	コバルトブルー	40	3.4	1.7	1.2	コバルトブルー
2	3.5~3.8	2.8	1.2	タ	41	3.4	2.3	1.2	タ
3	3.4~3.5	3.0	1.1	タ	42	3.1~3.7	3.8	1.0~1.5	暗いコバルトブルー
4	3.6	2.1	1.2	タ	43	3.2	2.8	1.0	タ
5	3.7	2.5	1.4	タ	44	3.0	3.2	1.1	タ
6	3.2	3.2	1.2	タ	45	3.9	2.6	1.3	タ
7	3.8	2.0	1.4	タ	46	3.3	2.6	1.2	タ
8	3.0	3.6	1.3	タ	47	3.7	2.7	1.2	タ
9	3.5	2.0	1.4	タ	48	2.7	1.9	1.1	タ
10	3.4	2.4	1.3	タ	49	2.9~3.2	2.8	1.0~1.4	タ
11	3.3~3.7	1.9	1.2	タ	50	3.3	4.0	1.1~1.4	タ
12	2.9	2.5	1.0	タ	51	3.3	2.0	1.2	タ
13	3.4	1.7	1.2	タ	52	3.3	3.4	1.2	タ
14	3.3	2.0	1.1	タ	53	3.6	1.7	1.2	タ
15	3.4	3.3	1.2	タ	54	3.5	2.1	1.1~1.4	タ
16	3.6	3.0	1.2	タ	55	3.7	2.7	1.3	タ
17	3.4	2.2	1.4	タ	56	3.5	2.7	1.2	タ
18	3.0	2.7	1.1	タ	57	3.0	2.0	1.3	タ
19	2.9	1.8	1.2	タ	58	3.8	2.6	1.2~1.4	タ
20	3.4	2.3	1.2	タ	59	3.5	2.6	1.0~1.4	タ
21	3.4	3.9	1.2	タ	60	3.8	2.6	1.3	タ
22	3.6	2.9	1.3	タ	61	3.7	2.7	1.2	タ
23	2.8	2.4	1.0	タ	62	2.8	2.1	1.0	タ
24	3.4	1.7	1.3	タ	63	3.6	2.2	1.7	タ
25	3.8~4.1	2.4	1.2	タ	64	3.0	2.3	1.1	タ
26	3.4	2.7	1.2	タ	65	3.2	2.6	1.3	タ
27	3.7	2.5	1.1	タ	66	3.6	2.9	1.3	タ
28	3.4	3.1	1.2	タ	67	3.8	3.1	1.1~1.4	タ
29	3.4~4.1	2.2	1.1~1.3	タ	68	3.2	2.6	1.3	タ
30	3.7	3.0	1.1	タ	69	2.8	1.9	1.2	タ
31	3.1	2.1	1.1	タ	70	2.8	1.8	1.2	タ
32	3.1	1.6	1.2	タ	71	3.1	1.5	1.6	タ
33	2.8	1.7	1.1	タ	72	3.0	1.8	1.3	タ
34	3.4	2.7	1.4	タ	73	3.4~3.8	2.4	1.4	タ
35	3.3	2.0	1.2	タ	74	2.5	1.9	1.1	タ
36	3.0	2.0	1.2	タ	75	2.9	1.7	1.2	タ
37	2.8	1.6	1.2	タ	76	3.6	1.6	1.2~1.4	タ
38	2.4	2.3	1.0	タ	77	2.1	1.8	0.9	タ
39	2.3	2.4	0.8	タ					

甕 (第7図) 口縁部の破片である。直線的に外反し、内外面ともにハケ目調整される。口唇部は面をなし、沈線状の浅い凹みと斜方向の沈線が反転する。胎土に角閃石を含み褐色を呈する。



第7図 1号石棺墓墓壙内出土
土器実測図 (1/3)

2号石棺墓（図版2-c、3-a、第6図）

調査区北西部の地表下約0.9mの深さで検出したが、北側は調査区域外に及び、墓壙の一部が西側に隣接する3号石棺墓の墓壙を切る。

石棺墓は、長さ1.3m+α、幅1.0m、深さ0.25mの隅丸長方形？の墓壙内に構築されているが、蓋石の露呈する第3層中では墓壙プランの検出は困難で、蓋石より約0.25m下がった第4層で墓壙プランを検出した。石棺には花崗岩の扁平な石材が用いられている。

棺の内法は、長さ45~50cm+α？、幅15~17cm、深さ20cmを測り、主軸方位はN53°30'Wをとる。

石棺は、両側板石と南東側の小口石が接するように組合わされているが、北西側の小口には石材がみられない。砂地のために石の抜き痕や木蓋の痕跡も確認できなかったが、両側板石の端と床石の端が揃っていることから、木蓋が存在した可能性もある。床石の高さは、両側板石・小口石の据えられる墓壙底面より約10cm高い位置に並べられているので、側板石・小口石を組合わせて据えて安定させた後に床石をおいた可能性がある。

棺内外からは何らの遺物も出土しなかった。

3号石棺墓（図版3-b・c、第8図）

調査区の北西隅に位置し、墓壙の一部は2号石棺墓墓壙と重複し、2号よりも先行する。

墓壙は長さ1.5m、幅1.1m、深さ0.3mの楕円形プランを呈しているが、北東部は2号石棺墓墓壙によってわずかに侵蝕され、西側端の一部は調査区域外に及ぶ。この墓壙も第3層中で検出された蓋石よりも、約0.2m低い第4層中で墓壙プランを検出したものである。

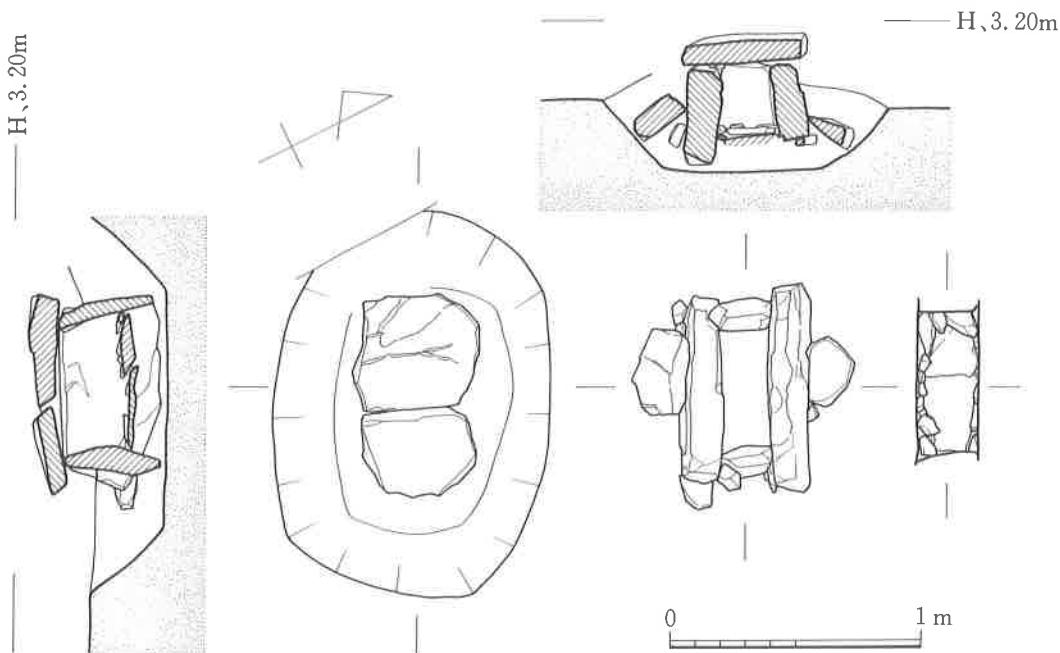
石棺は花崗岩の扁平な石材を用いているが、両側板石が小口石を挟んで、上面がほぼ水平になるように組合わせ、高さを合せるために側板石の下に小さな石を一部詰め込んでいる。床石は、墓壙底よりも10~15cm上に2枚の扁平石が並べられ、隙間は小さな石で充填されている。また両側板石が倒れないように、両外側は小口石よりも小さな石でそれぞれ支えられている。

棺の内法は、床面での長さ55cm、幅23~24cm、高さ25cmだが、上縁では長さ50cm、幅20cmに狭まっている。主軸方位はN61°Wをとり、わずかに幅広で、床面が高く、かつ蓋石も大きめな西側が頭位と推定される。

棺内全体に、赤色顔料が塗布されており、中央の北西寄りから、歯冠が出土した。またガラス小玉9点も出土したが、すべて棺内の埋土をふるいにかけて発見したので、棺内のどの部分からの出土かは分らない。なお、墓壙内からは何らの遺物も出土していない。

出土遺物

ガラス小玉（図版9-a、表2） 9点あり、外径2.3~3.2mm、厚み1.1~2.6mmの大きさ



第8図 3号石棺墓実測図 (1/30)

で、コバルトブルー、暗いコバルトブルーの色調を呈する。

4号石棺墓 (図版4、第9図)

調査区の中央部の、地表下約1.4mの深さで検出した。2号石棺墓の南東に位置し、墓壙の南東部は5号石棺墓墓壙によって一部切られた形に重複している。

石棺墓は、長さ2.6m、幅1.85m、深さ0.5mの隅丸長方形の墓壙内に構築されているが、花崗岩や玄武岩質の円礫12個が弧状に並ぶ、標石状の石組遺構が墓壙の上にみられ、石組下面から墓壙底までは0.8~0.9mの深さを測る。

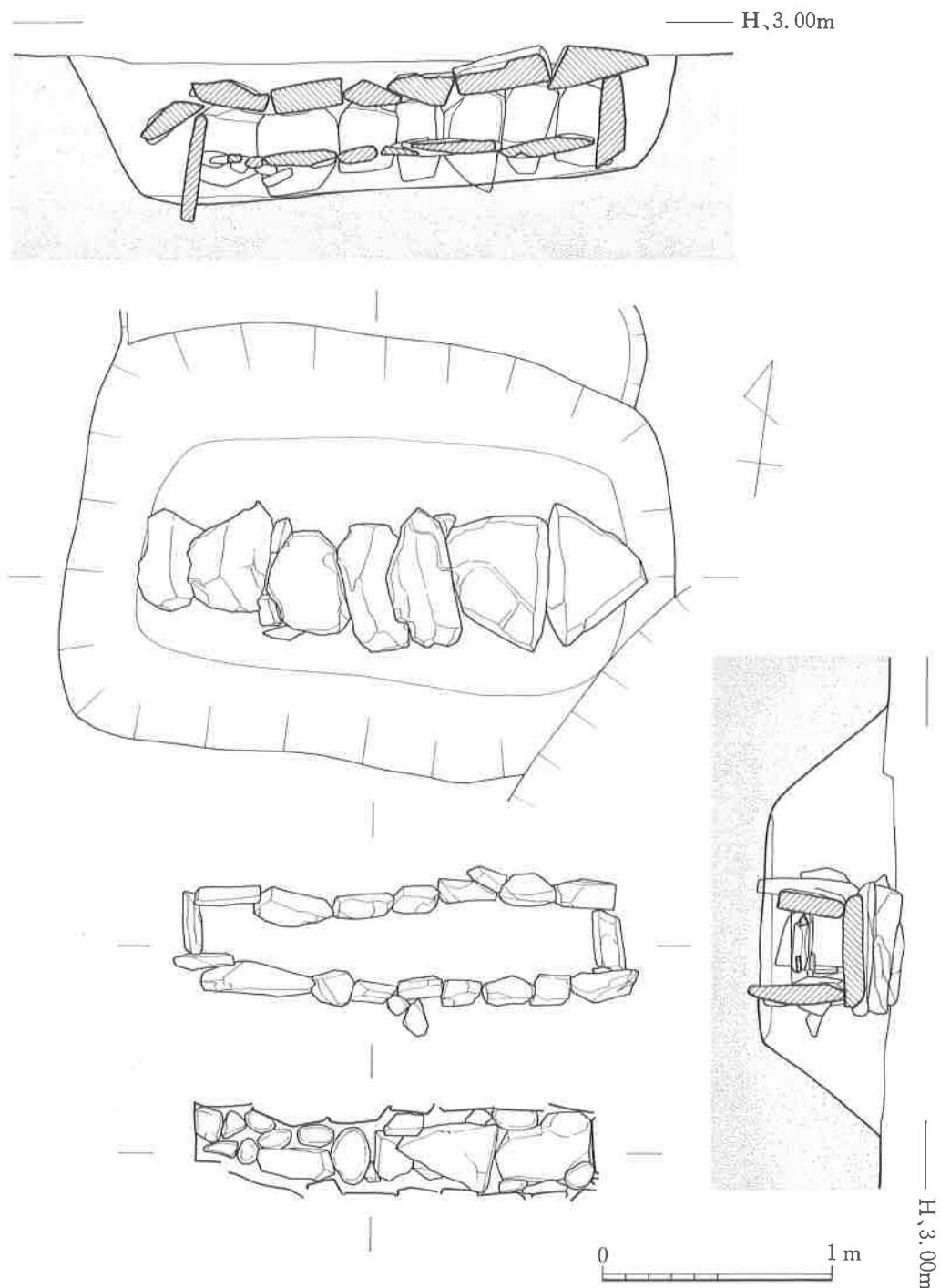
棺の内法は、長さ173cm、幅24~35cm、深さ20cmを測り、主軸方位はN83°Eをとる。棺内が幅広な東側に、歯冠片があり、頭位は東側である。

蓋石は7枚の長さ40cm、幅25cm、厚さ10cm程か、長さ60cm、幅40cm、厚さ10cm余程度のやや扁平な石を並べている。東小口側では、まず端に三角形の大きめの石を次に2枚目の石を並べている。西側では、小さめの石が用いられ、小口側から順に東へ少しづつ重なるように5石を並べている。そして中央部の石が最も後に被せられたようだが、石と石との間の隙間には

表2 3号石棺墓出土ガラス小玉一覧表

(単位: mm)

	径	厚さ	孔径	色調
1	2.3	2.1	0.8	コバルトブルー
2	3.2	1.1	1.3	タ
3	2.6	1.5	1.3	タ
4	3.0	1.9	1.4	タ
5	3.1	0.9	1.0	暗いコバルトブルー
6	3.7	1.5	1.4	タ
7	2.9~3.4	2.6	1.0~1.4	タ
8	2.8	2.2	1.2	タ
9	2.7	1.7	1.3	タ



第9図 4号石棺墓実測図 (1/30)

小さな石による充填もみられるものの、粘土による目貼りの痕跡はみとめられない。

石棺は、北側に8枚、南側に9枚のやや扁平な石を並べて側板とし、扁平石の小口石は側板石に挟まれる。側板には、長さ30~40cm前後、幅20~30cm、厚さ10~15cm程の石が立てて据えられるが、南側はやや小振りの石が用いられている。小口石は長さ40cm、幅25cm、厚さ7cm・10cm余の扁平石が立てて据えられる。全体的には東側がやや高くわずかな傾斜をもつものの、上面が揃うように据えられているので、なかには墓壙底にめり込むような石もみられる。

床石は、扁平石や円礫を敷き詰めているが、東側では長さ40cm、幅30cm、厚さ7~10cm程の扁平石、西側は円礫を主とする小さめの石で敷かれ、隙間には小石が詰められている。

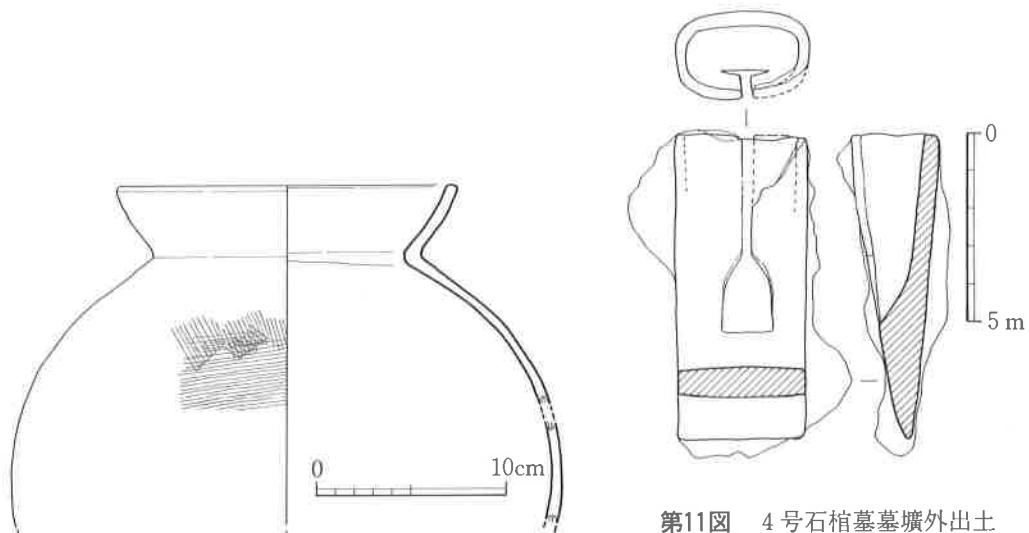
棺内では、歯冠片数点が東小口から30cm程の位置で出土した以外、遺物は出土しなかった。墓壙では、確実に共伴すると思われる供献遺物はみられないが、北側の一段浅い墓壙状プランの内側で土師器甕と、この北側外で鉄斧1点、墓壙南西隅の外から砥石1点が出土した。

出土遺物

甕（第10図） 布留式の甕で、復原口径18.0cm、胴最大径29.0cm、残存器高18.0cmの大きさ。外面の肩部は横方向のハケ目調整も加わり、内面のヘラケズリは頸部まで及ぶ。胎土に角閃石を含み、茶褐色に焼成されている。

鉄 斧（第11図） 長さ8.0cm、刃部幅3.3cm、袋部幅3.5cm、袋部厚さ2.3cmの大きさ。

砥 石（第30図3） 硬めの砂岩製砥石で、生目は細かく緻密である。長さ11.8cm、幅5.1cm、厚さ4.8cmの大きさ。



第10図 4号石棺墓壙内出土土器実測図 (1/4)

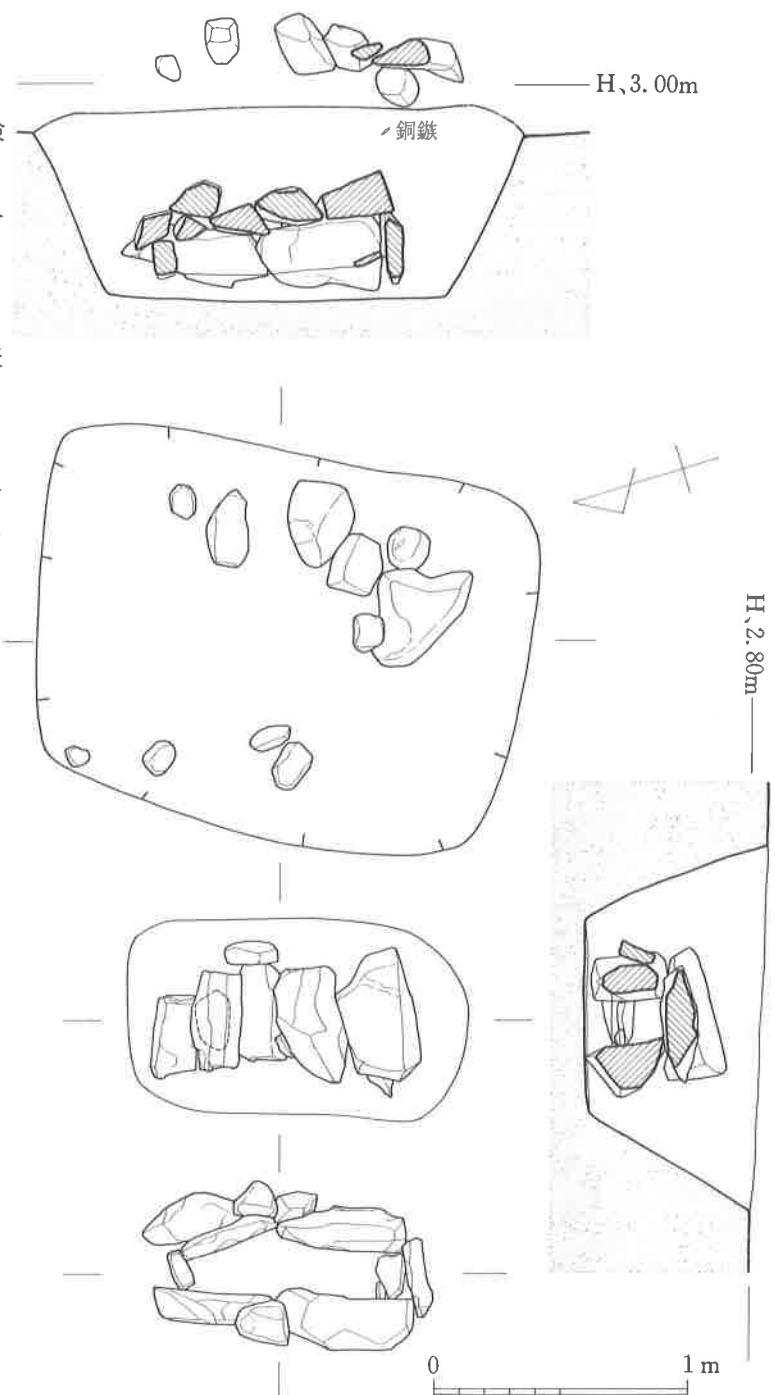
第11図 4号石棺墓壙外出土
鉄器実測図 (1/2)

5号石棺墓
(図版5、第12図)

調査区の中央部で検出された石棺墓で、4号石棺墓と一部重複するが、4号石棺墓よりも後出する。

墓壙プランは、地表下1.3mの標高2.8~2.9m位で検出したがそれより約20cm上位で標石と思われる石組遺構が検出された。標石は、人頭大よりも小さな石から長さ・幅共に30cm程の石など7石がわずかに弧を描いて並ぶものと、その南側に散在する小振りの4石があり、後に確認した墓壙プランの中にはすっぽりと収まる位置に相当する。墓壙は、長さ1.95m、幅1.50mの隅丸方形プランを呈し、深さは約0.70m残るが、標石の下面から墓壙底までは約1.0mの深さである。

石棺は、主軸方位をN21°30'Eにとり、墓壙の主軸とは約6°方



第12図 5号石棺墓実測図 (1/30)

向を違えて構築されている。

石棺内法は、長さ83cm、南小口幅20cm、北小口幅12cm、中央部幅25cm、深さ20cmを測る。蓋石は、長さ20~50cm、幅15~30cm、厚さ10~20cmのやや細長い石を6個並べているが、南側に大きめの石を使用している。

両側板石は、長さ50cm、幅30cm、厚さ10~20cmのやや大きな石を2個づつ並べ、北東側ではさらに外に1石を重ね、わずかに南側が高くなっているものの、ほぼ上縁の高さを揃えて据えられている。南小口は扁平な石で側板石の端を外側から押さえるように据え、北小口は側板石に挟まれて小振りな石が据えられる。床石は施設されないが、南小口に接する位置に長さ16cm、幅14cm、厚さ2~3cmの小さな扁平石1個がある。床面の高さは標高2,25~2,30m位である。

棺内では南小口側が幅広なので南側が頭位であろうが、棺内からは何らの遺物も出土しなかった。棺外の墓壙内では、標石で一番深い位置にある円礫の下10cmの、標高2,80mの位置で銅鏡1点が出土した。切先を墓壙の隅角の上側に向けて出土したが、木質は遺存せず矢柄の有無は不明である。しかし出土状況からして副葬遺物とみるべきであろう。

また、墓壙の南側外から小形甕が、東南外から砥石1点が出土した。

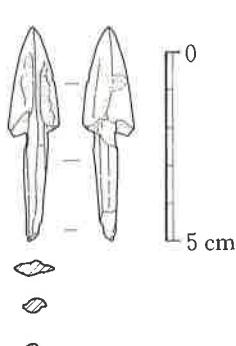
出土遺物

銅 鏡 (第13図) 全長56mm、先端部の長さ28.5mm、最大幅14mm、厚さ4mm、基部の最大幅6.3mm、厚み4mmを測る。鋳造時の型ズレによる甲張りがかえり部に残り、基部はわずかに甲張りを落としているが、先端部は研磨によって調整されている。

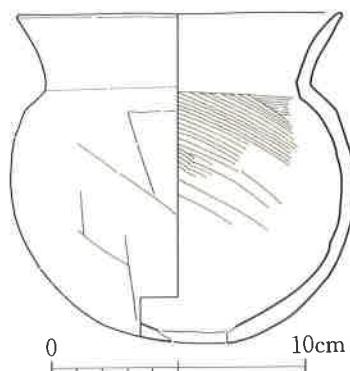
甕 (第14図) 口縁部

は約1/4残るが、復原口
径12.8cm、器高12.9cm、
胴最大径13.7cmの大き
さ。口縁部は外反りでヨ
コナデ調整され、胴外面
はケズリに近い板状原体
によるナデ、内面はハケ
目調整されている。胎土
に砂粒をやや含み、茶褐色
に焼成され、丸底の底
部に焼成後の穿孔がある。

砥 石 (第30図4) 細
粒の砂岩製砥石片で1号
土壙出土砥石と接合する。



第13図 5号石棺墓墓壙内
出土銅鏡実測図 (1/2)



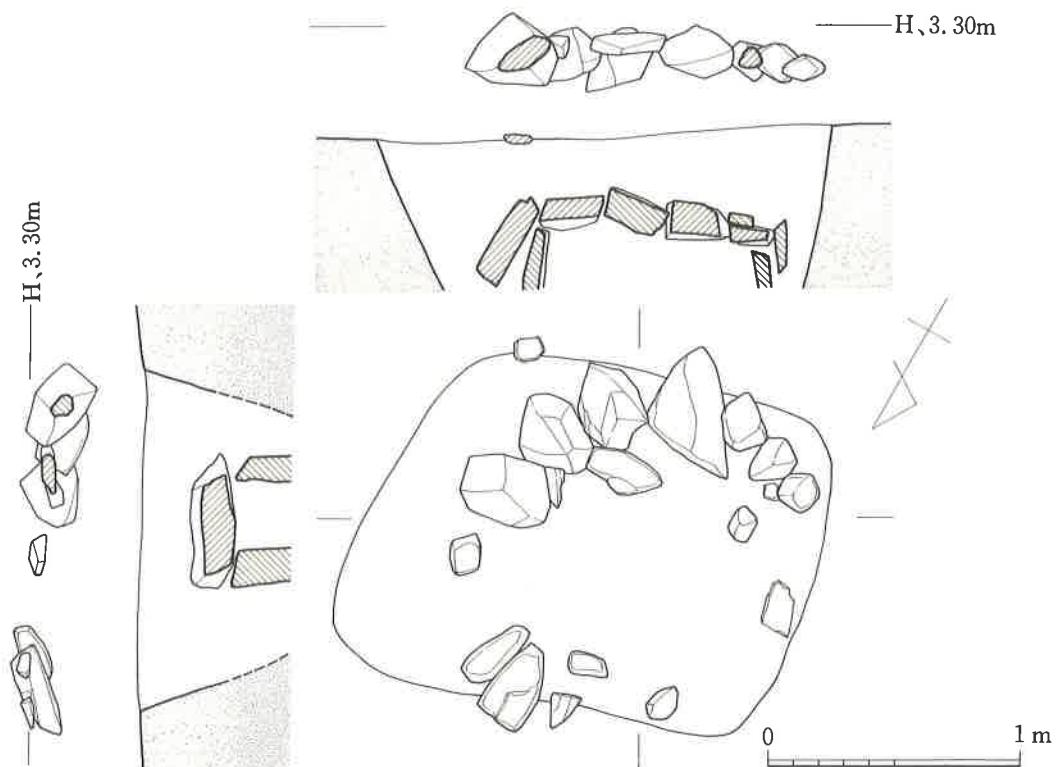
第14図 5号石棺墓墓壙外出土
土器実測図 (1/3)

6号石棺墓（図版6、第15・16図）

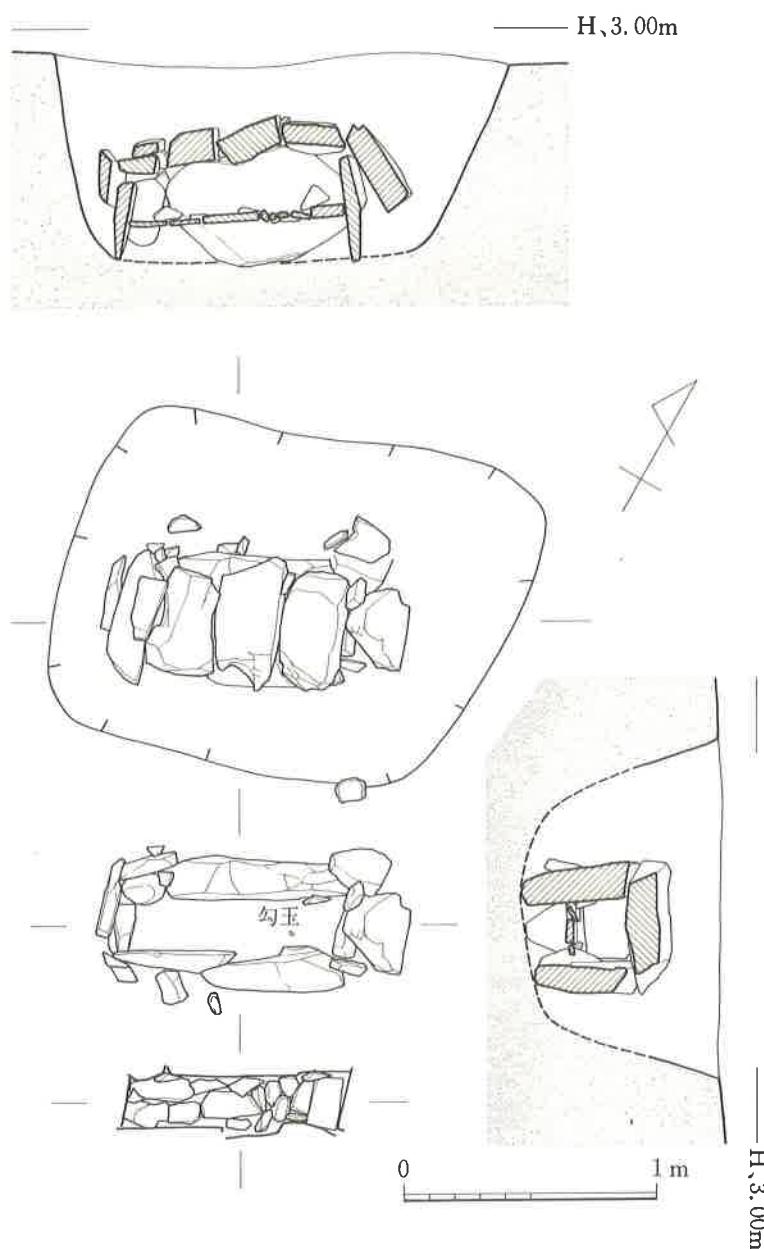
調査区の東南隅部で検出した。石棺は、長さ1.75m、幅1.35m、深さ0.8mの不整隅丸方形プランの墓壙内に、主軸方位M60°Eで構築されているが、表土下約1mの標高3.1～3.2m位に、拳大より一回り大きめな円礫から30～40cm角大の石17個で、直径1.5m程の環状を呈する石組遺構があり、本来は石組遺構の下面が墓壙上縁であったと推定される。また、環状の中の空いた部分は盛土状の高まりがあった可能性もある。

石棺内法は偏長方形（平行四辺形）プランで、長軸87cm、幅20～25cm、高さ20cmを測り、使用される石材がやや大きめで、わずかに高い位置になる東北側が頭位と推定される。棺内には赤色顔料が塗布されるものあまり顯著ではない。

側板石は、両側ともに2枚の大振りな石を並べている。北側は長さ80cm、幅45cm、厚さ15cm程の大きさの花崗岩扁平石と、高さ30cm、幅15cm、厚さ12cm程の円礫状の石を並べ、南側は長さ60cm、幅40cm、厚さ10～15cmの花崗岩と、長さ50cm、幅35cm、厚さ10cm弱の扁平石を端が重



第15図 6号石棺墓標石実測図 (1/30)



第16図 6号石棺墓実測図 (1/30)

なるように並べ、東側がやや高めだが上面が揃うように据えられている。小口石は側板石に挟まれる形（東北隅は角がほぼ接している）に組まれているが、東側の小口石は長さ43cm、幅25cm、厚さ7cm程の扁平石が、西側は長さ30cm、幅20cm、厚さ8cmの扁平石が立てて据えられている。

床石は、東小口側では扁平石の長軸が小口石に平行する方向に敷かれるものの、中央部から西小口側は側板石に平行する方向に敷かれている。敷石面の標高は2.25～2.30mの高さで、東側が僅かに高くなっている。

蓋石は、長さ40～50cm、幅15～30cm、厚さ10～15cmの扁平石4枚を並べて棺

を覆い、隙間を生じる部分には小さな石を詰めている。両小口に立てかけられている扁平石も、蓋石と一連のものであろう。しかし、目貼り粘土の痕跡は全くみられなかった。

棺内からはガラス小玉42個、ガラス勾玉1個が出土し、蓋石上からもガラス小玉1個が出土

表3 6号石棺墓出土ガラス玉類一覧表

(単位: mm)

種類	径	厚さ	孔径	色調	種類	径	厚さ	孔径	色調
1	勾玉		1.5	暗いスカイブルー	23	小玉B	4.9~5.5	2.9	1.9
2	小玉A	3.8	5.5	やや暗いスカイブルー	24	タ	4.3	3.7	2.1
3	タ	4.3	4.5	タ	25	タ	4.2	4.0	1.1
4	タ	3.3~3.6	3.8	タ	26	タ	3.9	3.3	1.1
5	タ	3.4	5.1	淡いスカイブルー	27	タ	4.4	2.8	1.4
6	タ	3.8	5.0	スカイブルー	28	タ	3.1	2.2	1.2
7	タ	3.3	4.7	淡い青緑	29	タ	3.9	2.5	1.5
8	タ	4.0	4.1	タ	30	タ	3.4	2.8	1.4
9	タ	4.1	4.5	タ	31	タ	3.5~4.0	3.7	1.2
10	小玉B	4.1	3.2	青緑	32	タ	3.9	3.0	1.4
11	タ	4.8	3.1	タ	33	タ	3.7	3.1	1.3
12	タ	4.8	2.7	タ	34	タ	3.2	3.1	1.2
13	タ	4.5	3.4	タ	35	タ	3.4	2.5	1.2
14	タ	4.6	3.4	タ	36	タ	3.8	2.5	1.4
15	タ	4.0	3.9	タ	37	タ	3.5	2.1	1.5
16	タ	4.3	2.6	タ	38	タ	4.0	3.0	1.5
17	タ	4.4	3.6	タ	39	タ	5.0	2.3	1.5
18	タ	4.3	3.1	タ	40	小玉C	4.5	1.9	1.5
19	タ	4.6~5.0	4.0	やや暗いスカイブルー	41	タ	4.7	1.8	1.2
20	タ	4.7	3.3	タ	42	タ	3.9	1.6	1.2
21	タ	4.0	2.6	タ	43	タ	3.6	1.9	1.6
22	タ	4.3~5.0	2.8	タ	44	タ	3.8	1.9	1.5

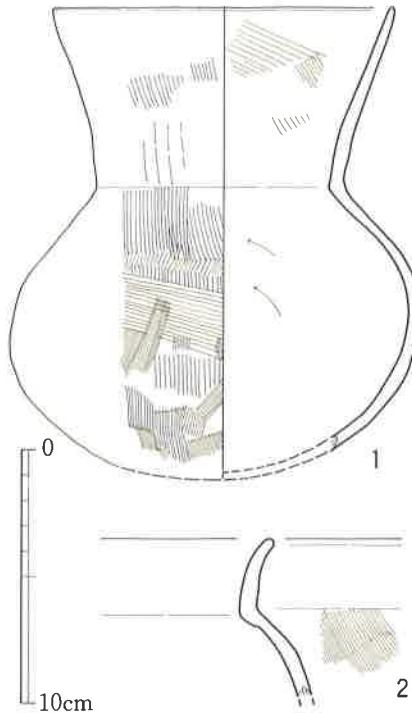
しており、勾玉や小玉の出土位置は蓋石の隙間の下に相当するので、蓋石上にあったものが転落したものと推定される。

墓壙内の棺外からは何らの遺物も出土しなかったが、墓壙外の北側で土師器甕片・壺が各1点出土しており、壺は供獻土器であろう。

出土遺物（表3、第17図）

ガラス勾玉 気泡のあるガラス製で、暗いスカイブルーを呈する。尾の部分が欠けており、現存長22.3mm、頭部の幅7.7mm、厚さ7.3mm、尾部側での幅6.2mm、厚さ4.4mmの大きさで孔径は1.5mmを測る。

ガラス玉 普通の小玉（小玉B）と、管玉状のもの（小玉A）、臼玉状のもの（小玉C）の3種類がある。小玉Aは径が3.3~4.3mm、厚みが3.8~5.5mmの大きさ、小玉Cは径が3.6~5.0mm、厚みが1.9mm以下の大きさで、小玉Bはその中間である。色調は青緑色系のもの



第17図 6号石棺墓墓壙外出土
土器実測図 (1/3)

とスカイブルー系のものがみられる。

壺（第17図1） 復原口径13.5cm、胴最大径16.0cm、残存器高18.2cmで18.6cm程度の器高であろう。扁球形の体部に、長めの口縁部がわずかに外反して立ち上がる。外面と口縁部内面はハケ目調整されて、口縁部外外面はヨコナデが加わる。底部付近のハケ目は細かい。体部内面は頸部までヘラケズリされている。砂粒と角閃石を胎土に含み、黄茶褐色に焼成されている。

壺（第17図2） 口頸部の破片で、口縁部はわずかに外反し、端部は丸みをもつ。口縁部内・外面はヨコナデ、体部外表面はハケ目調整、内面はナデられている。

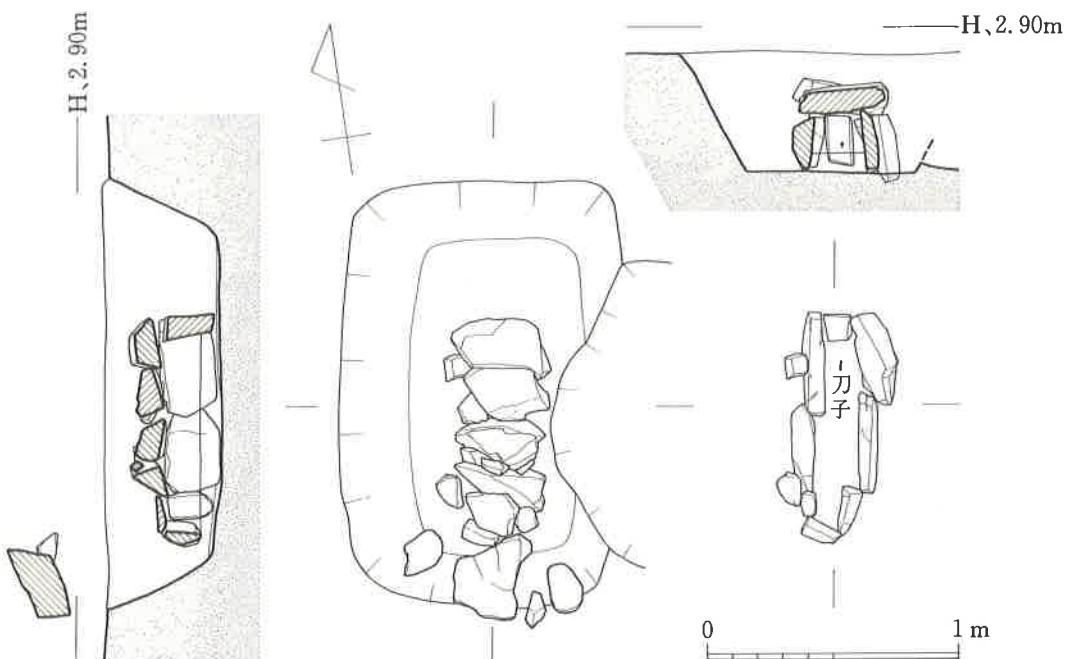
7号石棺墓（図版7-a・b、第18図）

調査区の南西部にあり、1号甕棺墓と墓壙が重複し1号甕棺墓より先行する石棺墓である。

墓壙は、長軸1.70m、短軸1.10mの隅丸長方形プランで、深さ0.45mを測るが、南側墓壙縁の上に標石と推定される4石があり、石の下面までの約0.15m高さが深さに加わるであろう。

石棺は、ほぼ南北に長軸をもつ墓壙内に、花崗岩扁平石を主に用いて、主軸方位N 9°Eに構築される。

石棺の内法は、長さ80cm、北小口幅15cm、南小口幅10cm、中央部幅20cm、高さ約15cmを測るが、床石がないので高さは不確実である。一応、南小口石の下面と、棺内出土鉄刀子の高さをもとに床面を推定したが、この面は標高2.40mである。



第18図 7号石棺墓実測図 (1/30)

石棺側壁は、東西ともに3石が並べられ、北側が大きく南側が小さい石で、端が少しづつ重なるように据えられている。小口石は長さ18cm、幅10cm、厚さ5~10cmの石で、北小口は両側板石に挟まれ、南小口は角が接するように据えられている。蓋石は5枚の扁平石とその隙間を充填する小振りの石で構成され、目貼り粘土などの施設の痕跡はみとめられなかった。

両側板石に大振りな石を用いる北側が頭位と推定されるが、棺内では、北小口から10~15cmの位置で鉄刀子1点が出土し、ガラス小玉2点も出土した。棺外・墓壙内から遺物は出土しなかった。

出土遺物

鉄刀子 (第19図) 関部付近で折れ曲がっているが、全長9.1cm、刃部長4.2cm、幅0.8cm、厚さ2.5mm、基部の幅3~5mm、厚さ2.5mmの大きさで、木質は遺存しない。

ガラス小玉 2点ともにスカイブルーを呈する。1点は外径5mm、厚さ3.9mm、孔径1.3mmで、あと1点は外径3.8mm、厚さ4.1mm、孔径1.2mmの大きさである。

1号甕棺墓 (図版7-c、第20図)

調査区の南部の地表下1.4mで検出した。一部重複する7号石棺墓に後出する遺構である。墓壙は、長さ1.2m、幅1.05mの隅丸方形プランで、0.5mの深さをもつが、標石と推定される石の下面からは0.65mを測る。この石は、花崗岩の角礫2個と円礫1個で、墓壙の東上縁に沿って並び、広口壺の口縁部破片が脇にある。

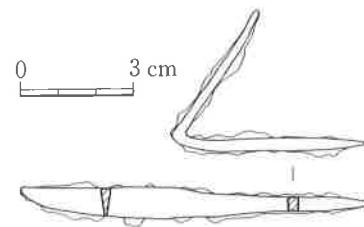
甕棺は、複合口縁大形壺を下甕にして、口縁部を打ち欠いた広口壺の底部側を挿入したものであり、墓壙上から出土した口縁部は上甕から打ち欠かれたものである。埋置状況は、主軸方位をN32°30'Eにとり、傾斜角度約12°で、北西方に上甕がある。

甕棺内には赤色顔料が、棺外の一部には黒色顔料が塗布されている。棺内外からは何らの遺物も出土しなかった。

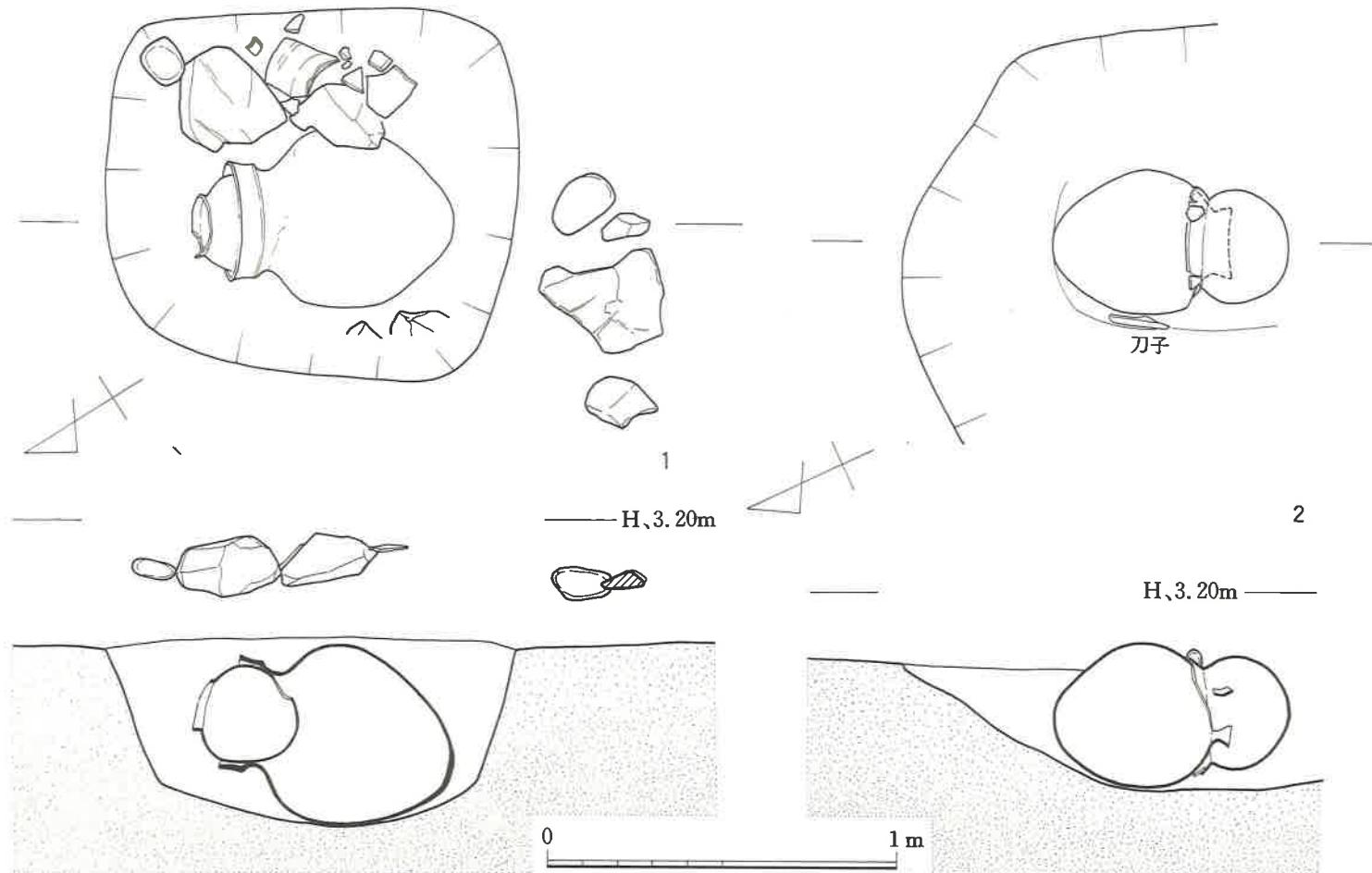
甕棺 (図版9-b、第21図)

上甕 口縁部約1/3を欠く。口径27.9cm、器高38.8cm、胴最大径28.6cmの大きさで、体部は蕪形を呈していて、底部は尖り気味の丸底。口縁部は大きく外反し口縁端部はやや角張る。外面と内面の口縁部はハケ目調整、体部内面は頸部までヘラケズリされている。胎土に砂粒・金雲母を含み、焼成良好で、淡茶褐色を呈する。

下甕 完形で口径34.0cm、器高65.1cm、胴最大径51.7cmの大きさ。体部は倒卵形を呈して



第19図 7号石棺墓内出土
鉄器実測図 (1/2)



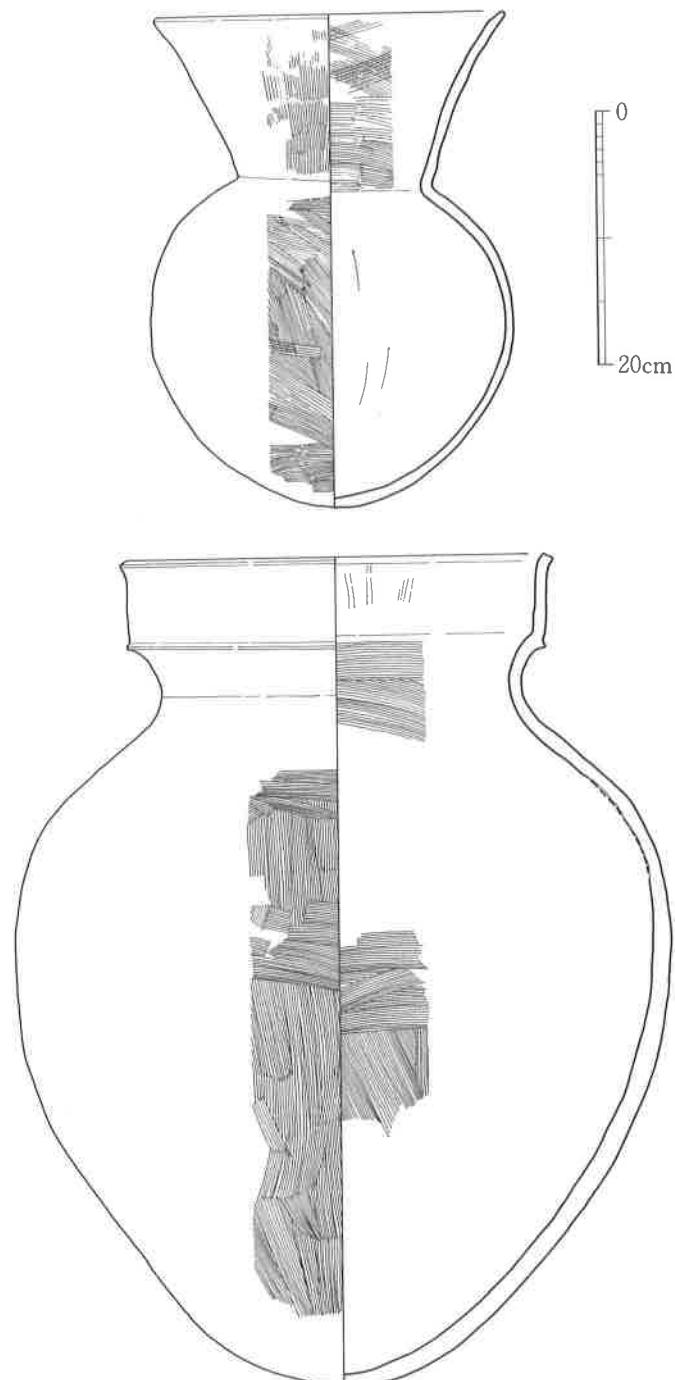
第20図 1、2号斂棺墓実測図（縮尺1/20）

いて、口縁部はわずかに内彎するも直立氣味に立ち上がり、口縁端は短く外反して面取りされている。体部外面は縦方向中心のハケ目調整だが、胴最大径部分と肩部に横方向のハケ目、底部付近はケズリが加わる。体部内面はハケ目調整とヘラケズリで、口縁部内外と頸部外面はヨコナデ、頸部内面は横方向ハケ目調整されている。胎土に砂粒・金雲母を含み、良好な焼成で、黄褐色ないし淡茶褐色を呈する。口縁部内・外面と頸部から胴部の一部に黒塗りの痕跡が残り、内面全体に赤色顔料塗布の痕跡がみられる。

2号甕棺墓 (図版8-a、第20図)

調査区の南西隅の地表下1.4mで検出したが、墓壙の南・西側は調査区域外に及ぶので、墓壙の全容と標石について分らない。

甕棺は、大形壺に鉢形土器を被せたもので、主軸方位をN25°Eにとり、埋置角度約7°だが、南西側の上甕はズリ落ち氣味である。



第21図 1号甕棺実測図 (1/6)

棺内は、赤色顔料が塗布されていて、何らの遺物も出土していない。棺外では下甕の西側に、切先を南側にした刀子1点が出土した。副葬品であろう。

甕 棺 (図版10-a、第22図)

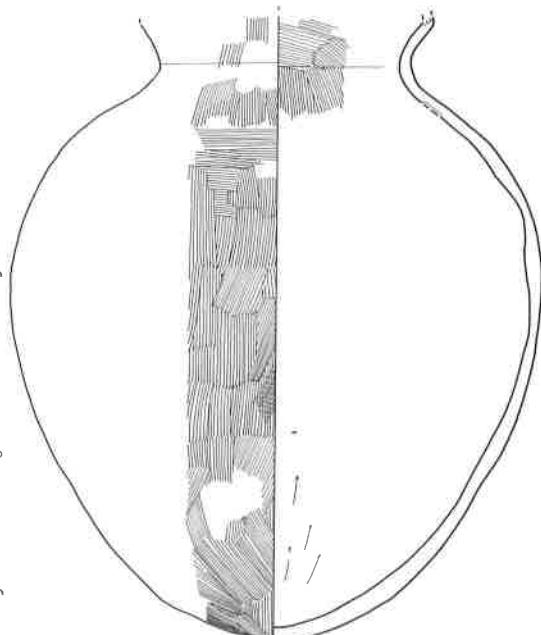
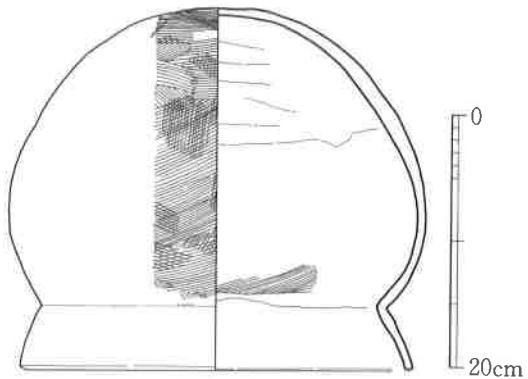
上 甕 完形で口径31.3cm、器高28.5cm、胴最大径33.1cmの大きさの鉢形土器。口縁部は内彎気味に開くが、口唇部の面取りはない。口縁部内・外面はヨコナデ調整、体部外面と内面の頸部下はハケ目調整だが、体部内面はヘラケズリないしへラナデ調整されている。胎土に砂粒・金雲母を含み、良好な焼成で淡茶褐色ないし淡赤褐色を呈している。内面には赤色顔料が塗布されている。

下 甕 複合口縁の大形壺であろうが、口縁部は打ち欠かれて残らない。残存器高48.7cm、体部は倒卵形をなし、胴最大径41.8cmの大きさ。外面は縦方向のハケ目で、肩部に横方向のハケ目が巡る。内面は頸部にハケ目がみられ、胴部はナデ、底部はヘラケズリされている。胎土に砂粒・褐色粒・金雲母・石英粒を含み、良好な焼成で、茶褐色を呈している。頸部内面は黒色に塗られ、内面全体に赤色顔料塗布の痕跡がみられる。

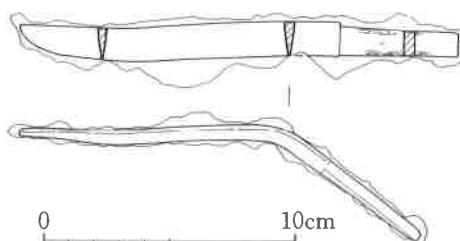
出土遺物 (第23図)

鉄刀子 関部付近で折れ曲がっているが、全長17.3cm、刃部長12.6cm、幅8mm、厚み4mm前後、基部幅10mm、厚み4.5mm前後を測る。基部には木質が一部遺存している。

土 壤 (図版8-b・c、第24図)



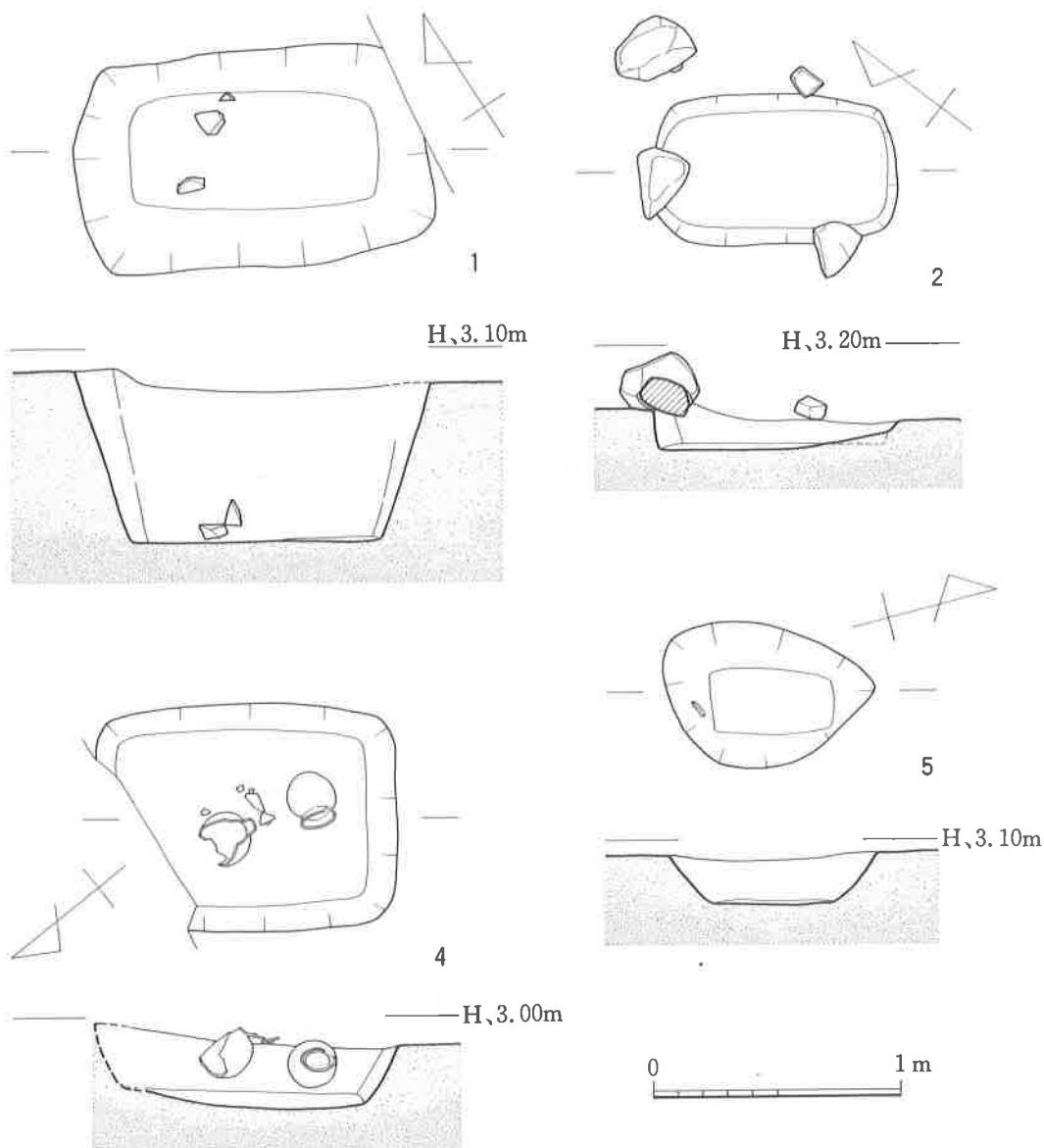
第22図 2号甕棺実測図 (1/6)



第23図 2号甕棺墓墓壙出土
鉄器実測図 (1/3)

1号土壌 調査区の東端で検出した土壌で、主軸方位N56°Wの隅丸長方形プランを呈し、上縁の長さ1.44m、幅0.95m、下端の長さ1.00m、幅0.47m、深さ0.70mを測る。土壌内下部から砥石2点と扁平石1点が出土した。

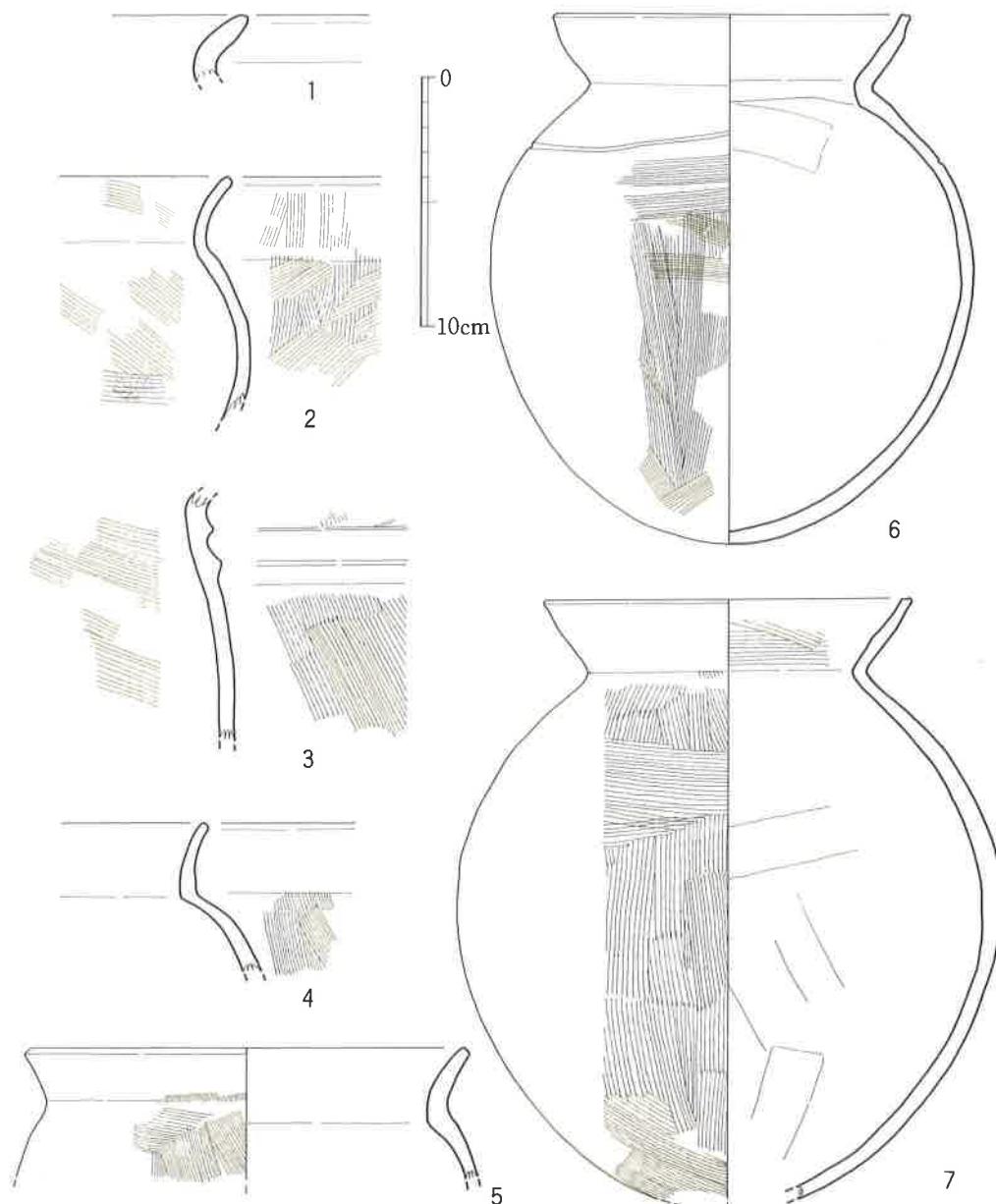
甕（第25図1） 小破片である。ヨコナデ調整される口縁部は外反し、端部は丸い。



第24図 1・2・4・5号土壌実測図 (1/30)

砥 石 (第30図 5・6) 3は細粒の砂岩製で、使用の痕跡はあまり顯著でない。5号石棺
墓墓壙外出土砥石と接合する。4も細粒の砂岩製だが3よりも薄く、使用の痕跡が少ない。

2号土壙 調査区の東端で検出した土壙で、主軸方位N 35°Wの隅丸長方形プランを呈し、
長さ1.00m、幅0.60m、深さ0.15m程だが、標高3.00mに標石と推定される石が散在する。



第25図 1～5号土壙出土土器実測図 (1/3)

甕 (第25図2・3) 2は口縁部が外反し、内外面ともにハケ目調整されている。3は頸部下に2条の三角凸帯をもつもので、内外面ともにハケ目調整されている。

3号土壙 (図版8-b) 調査区南東隅の標高3.00m位で検出した土壙で、主軸方位はN38°30'W。長さ1.38m、幅0.94mの隅丸長方形プランで、内外の堆積土は識別が困難であり深さは不明。土壙の北側に標石状の石がある。あるいは2号土壙に関連するのかも知れない。

甕 (第25図4・5) 2点ともに外反する口縁部をもち、胴部外面はハケ目調整される。4の口縁部が薄めなのに対して、5はやや厚めである。

4号土壙 (図版8-c) 調査区北端の標高2.90m位で検出したが、北側は調査区外に及ぶ。主軸方位N38°30'Eの隅丸長方形プランで、長さ1.20m、幅0.90m、深さ0.25mを測る。土壙底より約10cm浮いて、甕2点が横倒しの状態で出土した。

甕 (第25図6・7) 6は口径14.5cm、器高21.3cm、胴最大径19.6cmの大きさの完形品。体部は倒卵形よりも球形に近く、口縁部は内彎気味に開く。口縁端部は軽くつままれて面取りされている。胴部外面は縦位のハケ目が主で、肩部に横位のハケ目が加わり、1条の沈線が巡る。内面のヘラケズリは頸部のすぐ下まで及んでいる。胴部外面に煤が付着している。7は底部を欠くが、ほぼ完形に復原できる甕で、6より胴最大径の位置が低く、口縁部は直線的に開く。復原口径14.9cm、復原胴最大径21.8cm、復原器高24.6cmの大きさ。口縁端部は軽くつままれて面取りされている。胴部外面は縦位のハケ目が主で、肩部に横位のハケ目が加わる。口縁部内面はハケ目調整のあと口唇部付近は強めにナデられる。胴部内面のヘラケズリは肩部まである。胴部外面に煤が付着している。

5号土壙 1号土壙と2号土壙の間で検出された小土壙で、掘り過ぎのために上縁は不整形な梢円形を呈する。深さ0.20mの底面は長さ0.50m、幅0.25mの隅丸長方形で、主軸方位はN16°Eをとる。

2) 包含層出土遺物

1. 自然遺物

馬歯 (図版8-d) S46・W2点付近の標高3.55m位でまとまって出土した。この部分は第3層上面で南北80cm、東西40cmの範囲に及ぶが、土壙などのプランは確認できず、下の3号土壙との関係も不明。北側で下顎先端部の牙状の歯が並列して立ち、南側で臼歯部分の歯が倒れて並ぶ他は散乱した状態で検出された。

2. 土 器 (第26~28図)

1は1号土壙の北側から出土したKIC式(註1)の甕棺口縁片である。砂粒・金雲母を胎土に含み、暗褐色を呈する。

2は3号石棺墓の西側墓壙外から出土した。く字形に屈折する複合口縁の壺口縁片である。復原口径15.3cmで、砂粒・金雲母を胎土に含み、茶褐色を呈する。

3は1号土壙の北側から出土した口径15.8cm、器高20.4cm、胴最大径18.2cmの大きさの甕。口縁部は短く外反し、底部は小さなレンズ状をなす。内外面ともにハケ目調整されるが、外面の胴下半はナデ消されている。弥生終末期のものである。

4は4号石棺墓の北側から出土した復原口径11.7cm、器高13.2cm、胴最大径13.3cmの大きさの甕。口縁部は外反し、底部はわずかに欠けるがやや尖り気味の丸底であろう。外面と口縁部内面はハケ目だが原体によるナデに近く、胴部内面はナデ調整される。

5は複合口縁の大形壺ないしは甕の口縁で、内外面ともハケ目、口縁端面に交差する連続斜線文が刻まれる。

6は復原口径14.6cmの大きさの甕で、口縁部は外反して端部はつままれて面をなす。

7・8は布留式の甕口縁で、口縁部は内彎気味に開き、胴部内面のヘラケズリは頸部下まで及んでいる。7の端部はつまみ上げられたような形だが、8は上面が平坦になっている。

9は4号石棺墓の北側から出土したミニチュア土器。口径3.5cm、器高5.2cm、胴最大径5.4cm、底径3.3cmの大きさで、口縁部は外反しない。胎土に砂粒・石英・金雲母を含み、茶褐色に焼成されている。

10は復原口径15.8cm、器高6.85cmの大きさの椀形土器。口縁部は内彎気味で端部は丸みをもつ。口縁部内面はハケ目調整、内外の下半はヘラケズリされている。胎土に砂粒・褐色粒・石英を含み、茶褐色に焼成されている。

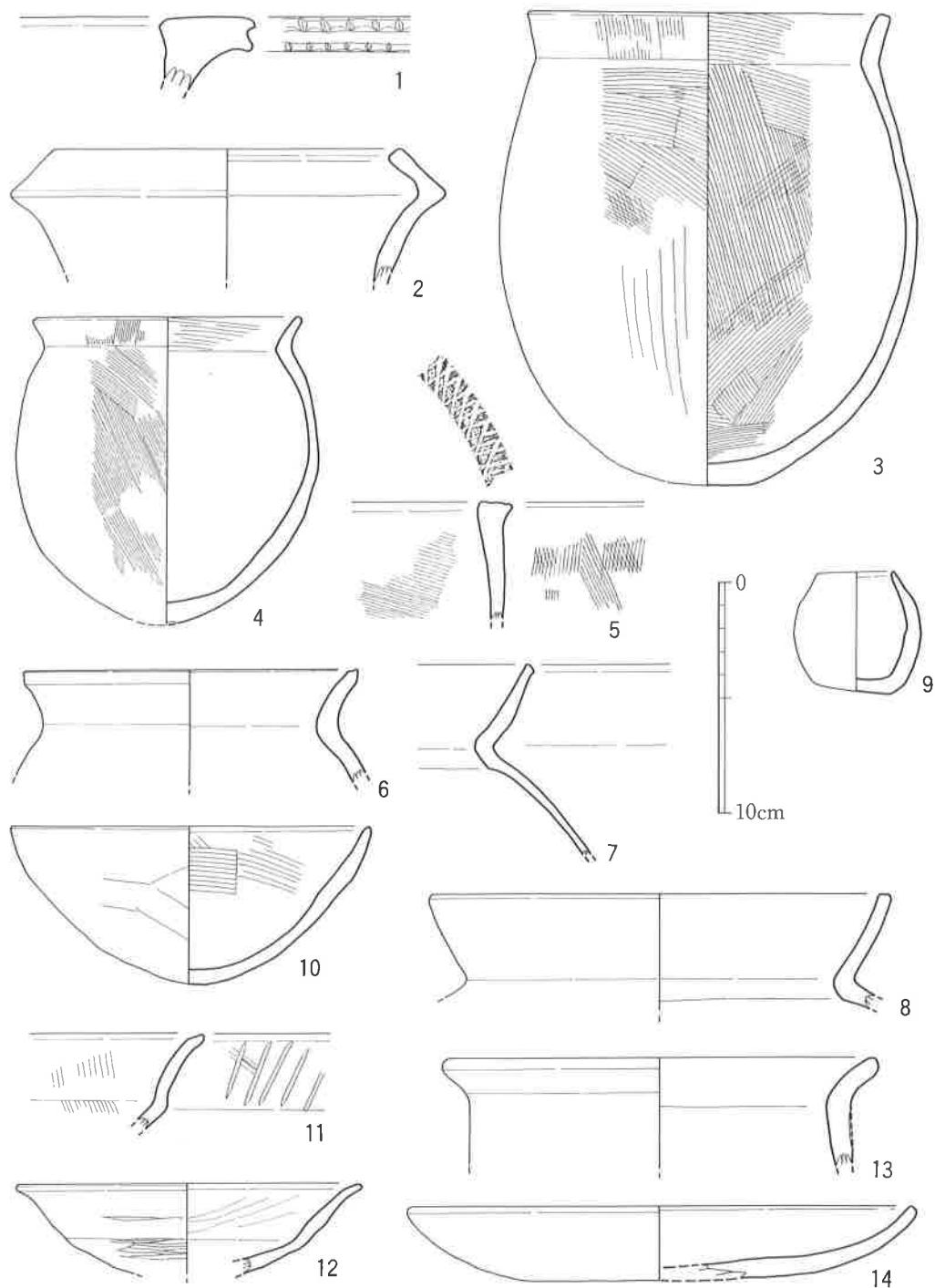
11・12は高杯の口縁部破片。11の外面は斜方向の暗文、内面はハケ目調整されている。12の外面はヘラミガキ、内面はハケ目がナデ消されている。

13は肥厚気味の口縁部をもつ甕片で、胴部内面はヘラケズリされている。胎土に細砂粒・石英粒を含み茶褐色に焼成されている。奈良時代のものであろう。

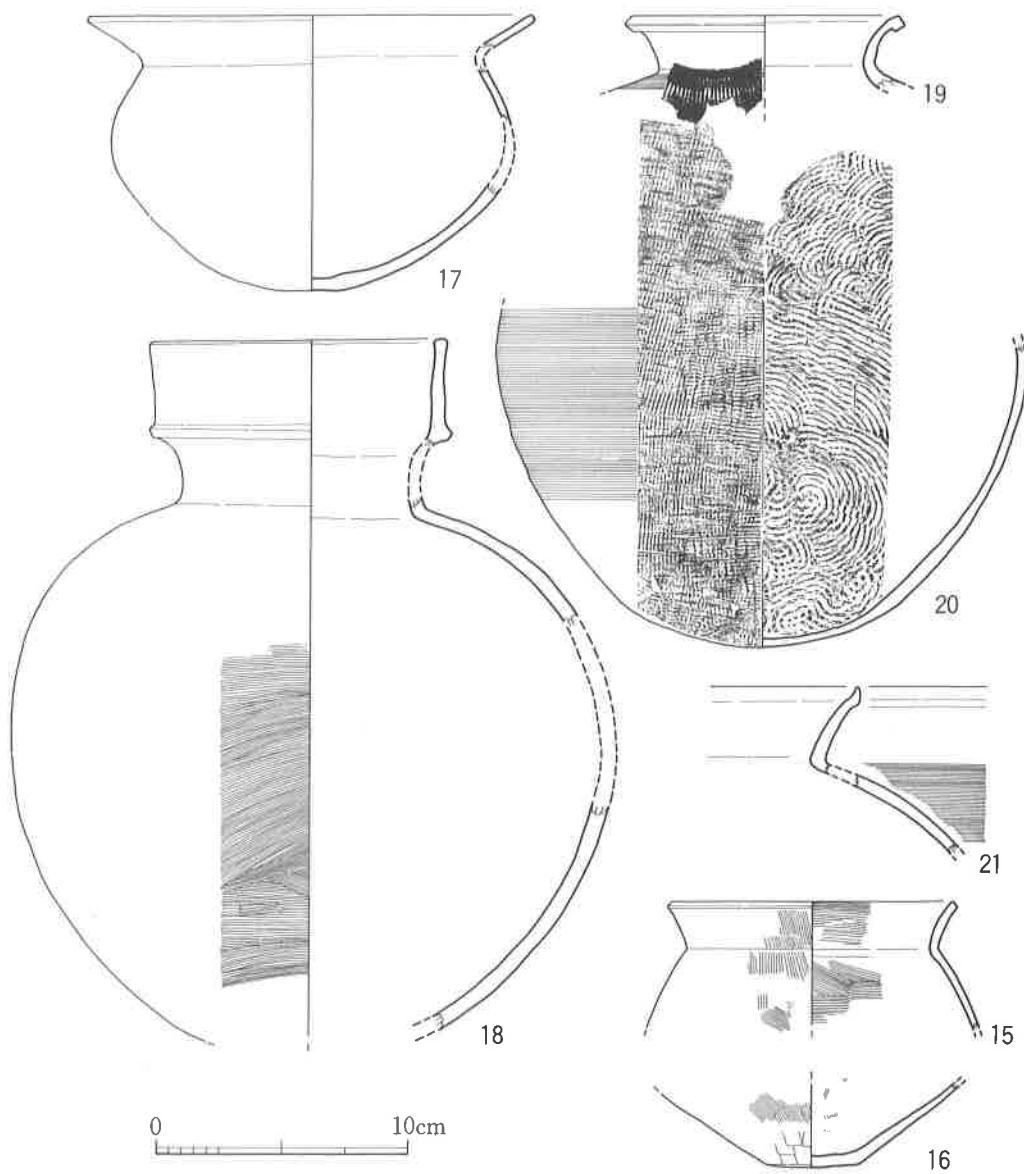
14は復原口径22.1cm、器高3.2cmの大きさの皿(盤)で、器面が風化しているが一部ヘラミガキの痕跡をとどめる。胎土に褐色粒・金雲母を多く含み淡褐色に焼成されている。

15は復原口径23.0cmの大きさの甕口縁で、口縁部は外反して端面は面をなす。内外面ともにハケ目調整されている。

16は底径7.2cmの壺底部片。底面はナデ調整されわずかに脹らむ。胴部外面はハケ目調整、底部付近はヘラケズリで、内面はナデ調整されている。15・16は後期後半のものであろう。



第26図 包含層出土土器実測図 1 (1/3)



第27図 包含層出土土器実測図 2 (1/6)

17は4号石棺墓北側から出土した、口径35.7cm、器高21.8cm、復原胴最大径32.0cmの大きさの鉢形土器。扁球形の体部で底部は丸く口縁部は直接的に開く。器面風化のため調整は不明。

18は5号石棺墓東側から出土した、口径23.5cm、残存器高23.5cm、復原胴最大径47.8cmの大きさの複合口縁の大形壺。体部は球形を呈し、口縁部は直立して端面は平坦、下端は凸帯状を呈している。肩部から上は器面風化のため調整は不明。胴部外面はハケ目調整、内面はナデ

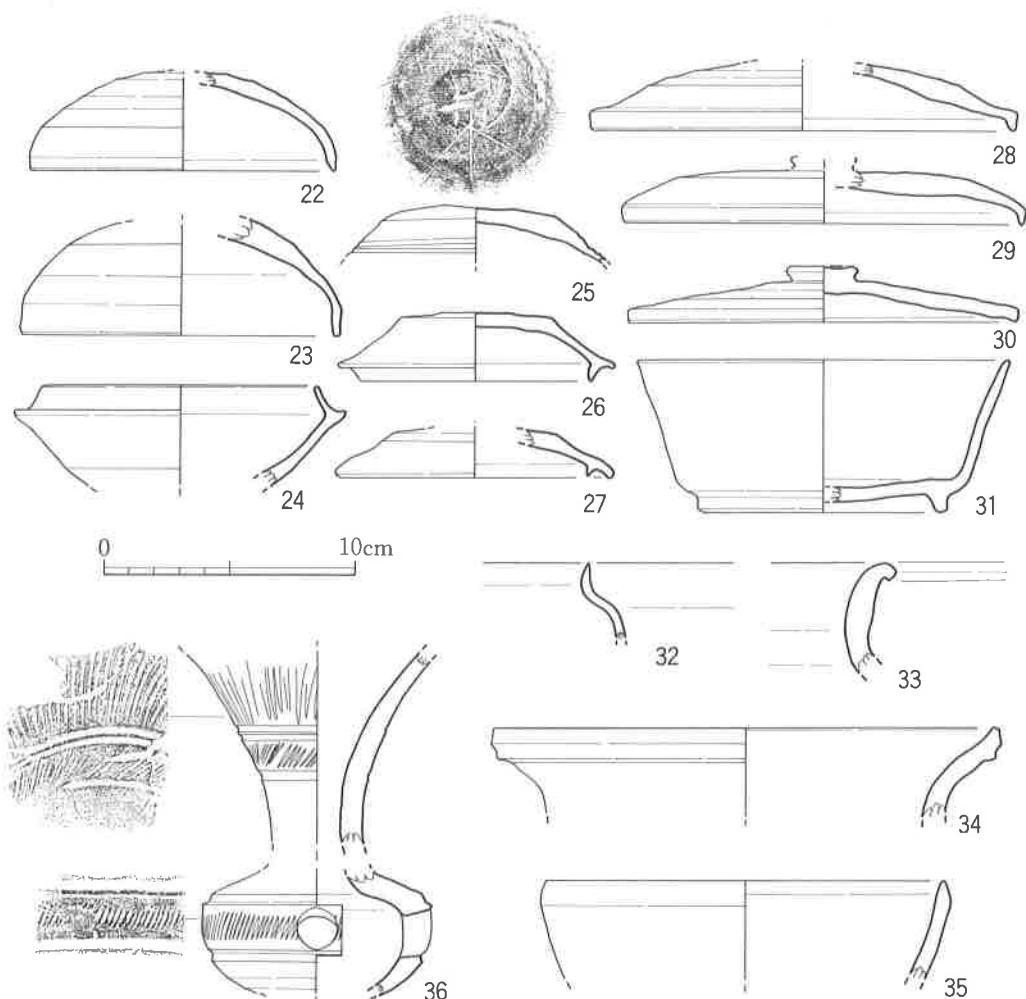
られている。布留式土器に伴う時期のものであろう。

19・20は4号石棺墓北側から出土した須恵器甕片。うまく接合しないが同一個体であろう。口径22.2cm、胴最大径42.0cmの大きさで、器高は46cm前後であろうか。口縁部は外反して端部で肥厚する。体部外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕がみられ、頸部から胴部の外面にはカキ目もみられる。

21は口縁端部が上につまみあげて内面が凹む。胴部外面はカキ目と一部に平行タタキ痕、内面はナデられるが同心円当て具痕も残る。

22は杯蓋片で外天井に回転ヘラケズリ痕がみられる。23は蓋受けのかえりをもつ杯身で復原最大径13.2cmの大きさ。外底部に回転ヘラケズリ痕がみられる。

24は杯蓋であろう。外天井はヘラ切離しのあとナデられ、鳥足状のヘラ記号が付されている。



第28図 包含層出土土器実測図3 (1/3)

25~27は身受けのかえりをもつ杯蓋で、25・26は復原口径が11.0cm前後の大ささだが、27は器壁が厚く口径も不明。26・27の天井は回転ヘラケズリされている。7世紀後半頃であろう。

28~31は鳥嘴状口縁部をもつ杯蓋で、29・31ではつまみのつくことが明らかで復原口径が18cm前後であろう。外天井に回転ヘラケズリ痕がみられる。7世紀末~8世紀のものである。

32は短頸壺の口縁部であろう。ヨコナデ調整され器壁は薄い。

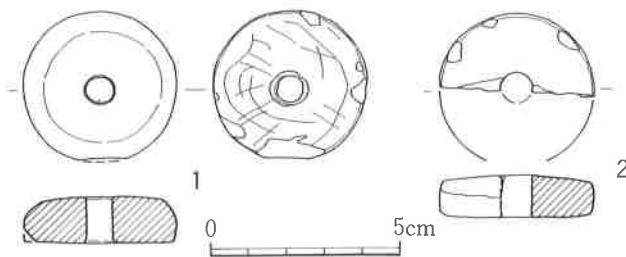
33・34は甕の口縁部で、33の口縁端部は外にまがり、34は口縁部に1条の三角凸帯が巡り端部は上につまみ上げられて内側が凹む。35は復原口径15.8cmの鉢ないしは椀であろう。

36は4号石棺墓の西側から出土した壺。頸部と体部が接合しないが同一個体であろう。ラッパ状に開く口頸部には2条と1条の沈線が巡り、2条沈線を挟んでヘラ先による連続斜線文が巡らされる。体部は肩の張る扁球形で最大径9.1cm、高さ5.5cm前後であろう。沈線が2条巡り沈線間に連続斜線文が施されて、直径1.6cmの円孔が穿たれている。6世紀頃であろう。

3. 石器・石製品・土製品（第30・31図）

石製紡錘車（1・2） 1は東

端部の第3層から出土した。絹雲母片岩製で一部を欠くが蒲鉾形の断面形を呈し、直径40mm、厚さ12mm、孔径6.5mmの大きさ。片面には細く弧状と放射状の線刻がある。2は3号石棺墓上の第3層下部から出土した。滑石製で半欠するが厚めの円板形を呈する。直径41mm、厚さ11mm、孔径8mmの大きさ。



第29図 包含層出土石製品実測図（1/2）

砥石（7~10） 7・8は第3層出土の砂岩製砥石で8の下面には敲打痕がある。9は調査区東端部第4層出土の凝灰岩質砂岩製で、方柱状の4面ともによく使用されて1面では溝状の使用痕がある。10は西端部第3層下部出土の砂岩製で、使用により大きく湾曲している。

石錐（11・12） 2点ともに東部の第3層から出土した打欠石錐である。11は長さ11.6cm、幅9.2cm、厚さ2.3cm、有効長9.9cmの大きさで、両面中央に敲打痕があるので敲石としても使用されている。時期的に古いものかも知れない。12は半欠して長さが不明だが、幅3.6cmを測る側縁にも打欠きがみられる。

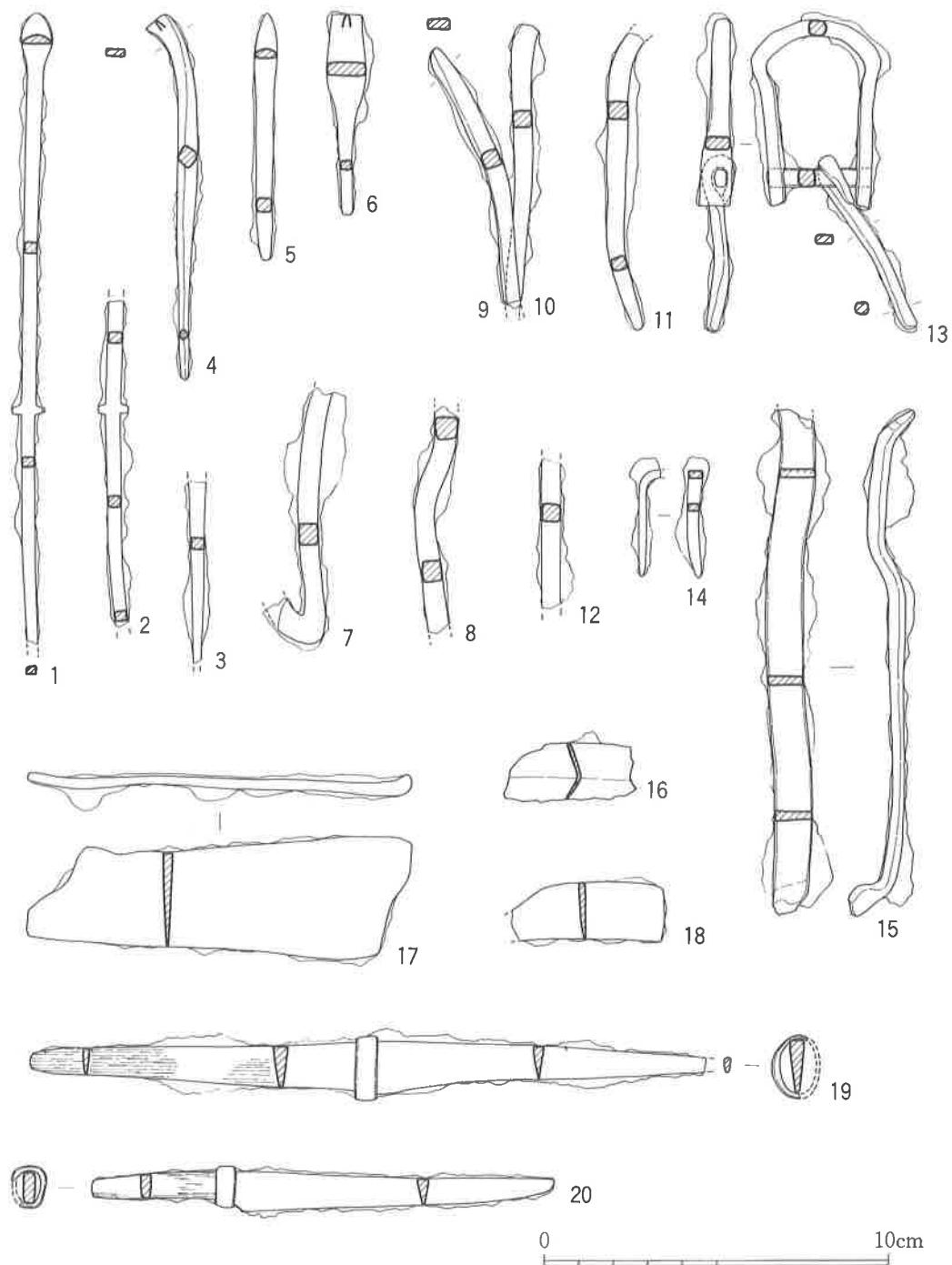
土錐（13~15） 13・14は東北部の第4層出土で精選された胎土で淡い灰黄褐色を呈する。13は長さ7.3cm、幅2.0cm、孔径0.6cm。14もほぼ同程度の大きさであろう。15は排土から探集したもので暗い茶褐色を呈する。長さ4.7cm、幅1.7cm、幅1.7cm、孔径0.3cmの大きさ。



第30図 包含出土石器・土製品実測図 (1/3)

3. 鉄 器 (第31図)

鉄 鎌 (1 ~ 6) 1は2号甕棺墓と7号石棺墓の間から出土した。基部端を一部欠き、現



第31図 包含層出土鉄器実測図 (1/2)

存長18.2cmの片丸造柳葉式である。鎌身は長さ1.4cm、幅0.9cm、厚さ2.5mm、棘状突起までの範囲は4mmの方形断面で長さ10.0cmを測る。2・3は東端部第3層出土の茎部破片である。4・5は南部第3層から出土した。4は全長10.7cmの方頭式、5は現存長7.2cmの柳葉式で棘状突起はみられない。6は一見マイナスのドライバーのようにみえるが方頭式の鎌であろう。現存長5.8cm、鎌身の長さ3.0cm、幅1.2cmを測る。

絞金具 (13) 東端部第3層から出土した。環状部は長さ5.4cm、幅3.8cm、厚み5~8mmで、基部端から0.6~1.0cmの所に軸受けが渡される。内部は長さ3.8cm、幅2.1~2.8cm、軸基部は扁平で軸受けに巻きつけられ、先端は方柱状を呈し、軸の有効長は4.1cmを測る。

鎌 (17) 西端部第3層から出土した。現存長10.2cm、幅2.7~3.5cm、背の厚さ2.5~4.0mmで木質は遺存しない。鎌とすれば左きき用であろう。

刀子 (19・20) 19は4号石棺墓北側の上層から出土した。切先の一部を欠き現存長19.6cmでこのうち刃部が9.5cmを占める。刃部は厚さ2~4mmで、関部幅は1.5cmを測る。基部の断面も二等辺三角形を呈し木質が残る。関部には幅6mm、厚さ2mmの環がある。20は南部の第3層下部から出土した。全長13.4cmのうち刃部は9.0cmを占める。背の厚み3mmで関部幅1.15cmを測る。基部には木質が残り、関部には幅6mm、厚さ2mmの環が取付けられていて柄は厚み1.0cm、幅1.2cm程度であろう。

不明鉄器 (7~12・14~16・18) いずれも西部の第3層上部から出土した。7~12は5~6mm角の棒状だが7・8は屈曲し、9の先端は扁平、11の基部は細くなっている。14は尖る先端から3.0cm長さでほぼ直角に曲がるがその先を失う。鎌のようなものであろうか。15は幅1.0cm、厚さ2.5~3.0mmの扁平板状で現存長15.3cmを測るが3ヶ所で曲がり、両端が欠損する。16は板状のものが稜をなして曲がる。18は刃をもつが本来の形は分らない。

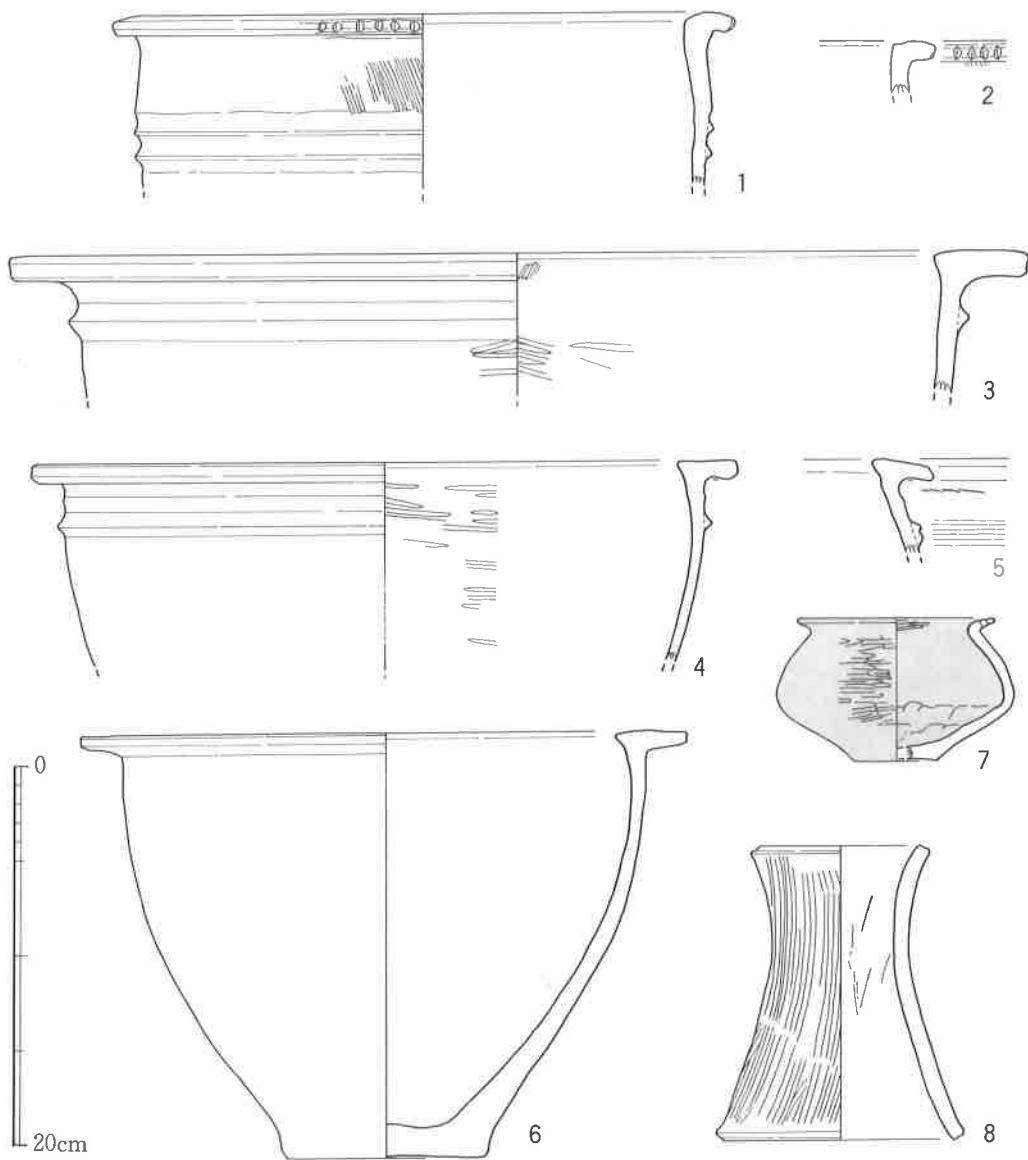
2. 簡易水道工事出土遺物

岐志・新町地区簡易水道事業に係わる掘削工事に伴って出土した遺物を、この項で紹介する1~14・20は御床松原遺跡に含まれる部分から出土した弥生土器である。

1・2は口縁部は如意形が強く折れて端部に刻み目が付され、外面はハケ目が施される。1は復原口径33cmの大きさで胴上部に低い三角凸帯が2条巡る。前期末の甕である。

3は平坦な逆L字形口縁と口縁下に三角凸帯が巡る甕棺で復原口径54cmの大きさ。内面にミガキの痕跡がみられる。4は復原口径37.4cmだが3と同様の特徴をもち、KⅡc式(註1)に分類される中期前半頃の土器である。

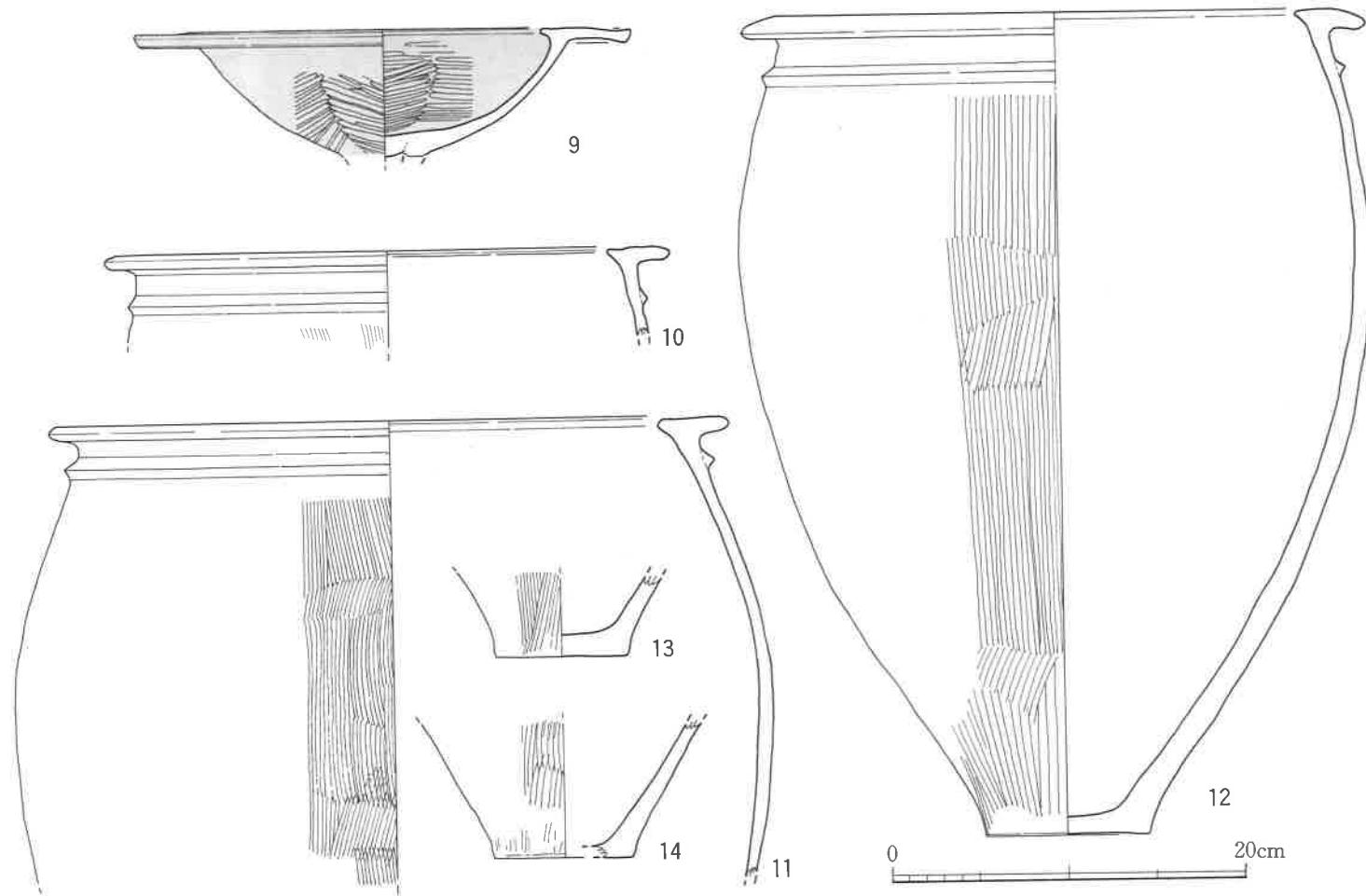
5は口縁部はやや外側が下がり、口縁下にM字形の凸帯が巡る。中期中頃のものであろう。



第32図 簡易水道工事出土土器実測図 1 (1/4)

6は復原口径31.9cm、器高22.2cm、底径10.9cmの大きさの鉢形土器である。器面はやや風化するが内外面ともナデ調整であろう。口縁部はKⅢa式(註1)に近い特徴をもつ。

7は丹塗磨研の短頸壺で口縁部に双孔が穿たれている。復原口径14.4cm、器高7.4cm、胴最大径12.6cm、底径4.4cmの大きさ。胎土に細砂粒・金雲母を含み焼成は良好。



第33図 簡易水道工事出土土器実測図 2 (1/4)

9は丹塗磨研の高杯で脚部を欠く。復原口径28.0cm、杯部高7.1cmの大きさ。内外面とも丁寧にヘラミガキされる。鋤先状をなす平坦な口縁部上面に放射状暗文がみられる。胎土に砂粒・金雲母を含み焼成は良好。7・9は中期中頃から後半のものである。

10・11・12は逆L字状口縁をもち胴の張る器形で、口縁下に三角凸帯が1条巡り、胴部外面はハケ目調整されている。11は復原口径38.4cmの大きさで、12は復原口径35.2cm、器高46.3cm、胴最大径35.7cm、底径9.3cmの大きさ。外面全体に煤が付着している。KⅢb式（註1）に分類される中期後半の土器である。底部破片13・14もこの頃のものであろう。

8の器台は器高13.4cm、口径9.4cm、裾径13.0cmの大きさで、外面は粗いハケ目調整、内面はナデ調整だが板状原体の圧痕がみられる。胎土に砂粒を含み焼成良好だが、二次的な火熱を受けている。後期に含まれるものである。

20は復原口径23.0cm、器高11.0cm、底径7.6cm大の鉢形土器。底部はレンズ状に脹らみ、体部は内彎気味に開くが器壁は厚めである。内外面ともにハケ目調整された後に下半部をナデ消して、口縁部はヨコナデで薄くまとめている。胎土に細砂粒を含み良好な焼成で黄褐色を呈している。弥生時代終末ないしは古墳時代前期のものであろう。

15～19、21～24は新町遺跡の部分から出土したものである。

15は甕棺墓をバックフォーの爪によって断ち割った際に出土したのであろう。口縁部・胴上半・胴下半がうまく接合しないが、図上で復原した。復原口径45.0cm、胴最大径56.2cmで、器高は80cm前後であろうか。口縁部は内彎気味に開く単純な口縁と複合口縁の中間的な形態をなしている。複合口縁としては口縁部は短めで、口縁端部はわずかに外反して口唇部は面取りされている。胴部は長めの倒卵形を呈すると思われるが底部は分らない。内外面ともにハケ目調整されるが、胴部外面にはタタキ目が残り、口縁部はヨコナデが加わっている。頸部下と胴下半にはコの字凸帯がそれぞれ1条巡る。口唇部と凸帯上にはハケ目原体の小口による斜方向の刻み目が施されている。胎土に砂粒を含み焼成良好で淡褐色ないし茶褐色を呈している。弥生時代終末期のKⅤ類の甕棺で（註1）そのe類に近い。県道福岡志摩原線部分から出土した。

16は外反する甕口縁部破片で、内外面ともにハケ目調整され、口唇部にハケ目原体によるジグザグの刻み目が施されている。弥生時代終末期のものであろう。新町遺跡東部の字天神畑の道路敷から出土した。

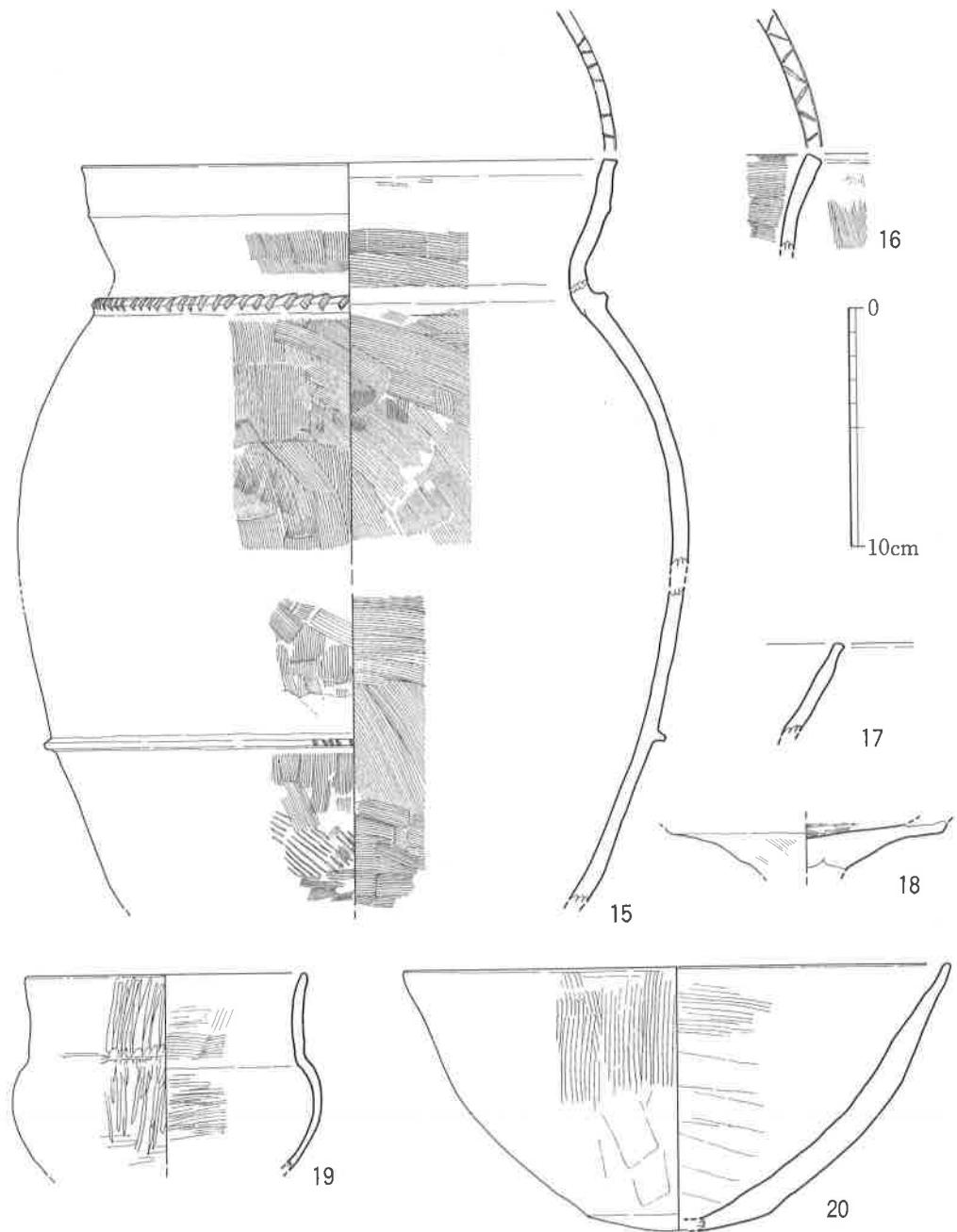
17は布留式甕の口縁部破片であろう。口縁端部は内外面ともにやや窪む。Ⅲ-1地点の南側を通る道路敷から出土した。

18は高杯の杯底部破片で内外面ともにハケ目の後ナデが加わっている。

19は口径11.8cm、残存器高8.3cmの広口壺で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向にハケ目調整されている。胎土に細砂粒・金雲母を含み、焼成良好で淡褐色を呈しているが、

胴部内面は黒褐色を呈す。18・19は弥生終末ないし古墳時代前期で、県道部分から出土した。

註1 橋口達也 1979 瓢棺の編年的研究 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI



第34図 簡易水道工事出土土器実測図3 (15、16は1/6、17~20は1/3)

III. 出土赤色顔料の分析

新町遺跡第3次調査の第2号甕棺墓および第3号石棺墓出土赤色顔料について、光学顕微鏡による観察と蛍光X線分析の測定を行ったところ、ベンガラであった。

試 料

第2号甕棺墓出土試料（No.1）および第3号石棺墓出土試料（No.2）とも土砂の中に少量の赤色顔料が含まれていた。実体顕微鏡下で土等を除去したのから、針先に着く程度の赤色顔料を採り、プレパラートを作成したり。残りをメノウの乳鉢で研和し蛍光X線分析の試料とした。

光学顕微鏡による観察

墳墓出土の赤色顔料としてはベンガラ（酸化第二鉄 Fe_2O_3 ）と朱（硫化水銀 HgS ）が考えられる。これらは特に微粒のものが混在しない限り、検鏡による識別が可能である。そこで、光学顕微鏡により、透過光・反射光40～400倍で検鏡したところ、両試料ともベンガラ粒子より成っていた。ベンガラ粒子には種々の形状があり、その中で産地あるいは製造方法の違いを示すかも知れないと考えられているものがある。これはパイプ状粒といわれているものであるが、今回の試料には含まれていなかった。

蛍光X線分析

以下の測定条件で蛍光X線分析を行った。装置;理学電機工業KK製蛍光X線装置、X線管球;Cr対陰極、分光結晶;LiF、検出器;S.C、印加電圧-印加電流;50KV-25mA。両試料とも赤色顔料の主成分元素としては、Feが検出された。

ま と め

以上の結果から、新町遺跡第3次調査の第2号甕棺墓および第3号石棺墓出土赤色顔料はベンガラであると考えられる。北部九州地方の甕棺墓から出土する赤色顔料はベンガラよりも朱が主流である（註1）。今回の例は墳墓出土赤色顔料の変遷を考える上で重要であろう。

註1 本田 光子 1988 弥生時代の墳墓出土赤色顔料 九州考古学 62

IV. おわりに

新町遺跡Ⅲ-1 地点では、石棺墓 7 基、甕棺墓 2 基、土壙 5 基などの遺構を標高 3 m 前後の部分で検出した。一方包含層では弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期、奈良時代などの遺物が出土し、馬の遺存体も発見された。

石棺墓は、調査区域内のほぼ全域にわたって検出され、甕棺墓 2 基は調査区南西部にのみ、土壙 5 基は東部にのみ検出された。大形壺などが北東部でも出土しているので、甕棺墓が北東側にも存した可能性も否定できないものの、石棺墓・甕棺墓・土壙の分布に若干差異がある。墓地群はさらに四方に広がるものと推定されるが、一応、西側に甕棺墓・東側に土壙を挟んだ形で、広がる可能性があろう。

石棺墓 7 基のうち、石棺の内法規模では 3 つの群に分けられる。

第 1 群 長さ 55cm・幅 20cm・深さ 20cm 前後の内法規模。1・2・3 号石棺墓

第 2 群 長さ 85cm・幅 20cm・深さ 20cm 前後の内法規模。5・6・7 号石棺墓

第 3 群 長さ 173cm・幅 24~35cm・深さ 20cm の内法規模。4 号石棺墓。

また、床石は 5・7 号石棺墓以外の石棺墓で床全面に敷かれている。

主軸方位では、1・2・3 号が北西—東南方向、4・6 号北東—西南方向、5・7 号が南北に近い方向をとっている。

これからは、蓋石下面の高さが標高 3 m 前後の 1・2・3 号石棺墓に共通点があり、2.5m 前後の 5・7 号石棺墓でも共通点がみとめられるが、第 1 群でも 1 号石棺墓と 2・3 号石棺墓では使用される石材の選定から差異がみられ、構造も異なる。

ところで昭和 61 年度に調査された I-2 地点での石棺墓（註 1）は、今回調査したⅢ-1 地点の石棺墓群と約 8 m の距離を隔てた北北西に位置している。I-2 地点の石棺墓は長さ 138cm、幅 30~34cm、深さ 20~25cm の内法規模で敷石があり、東西方向に主軸をもつ。内法規模では第 3 群に含めるべきものであるが、両側板は各 2 枚で据えられる点は 4 号石棺墓と異なる。蓋石上の標石の脇から出土した供献土器から、古墳時代前期布留式段階の時期が与えられている。

Ⅲ-1 地点の石棺墓では供献土器を確実に伴う例はないが、I-2 地点の石棺墓と同一の墓地群に想定しうる位置にあるので布留式段階を中心とした時期の墓地と考えるべきであろう。しかし、墓壙内出土土器片では弥生時代は終末ないし古式土師器がみられ、7 号石棺墓と重複して後出する 1 号甕棺墓に使用される複合口縁大形壺は布留式段階のものであるので、すくなくとも、床石のない第 2 群の石棺墓は布留式段階よりも先行する。また、5 号石棺墓出土の銅鏡は形態的には弥生時代の範甕に属するものである。この銅鏡が古墳時代初頭前後まで引継がれていた可能性も否定しえないが、すくなくとも布留式段階よりも先行するとして問題はないであ

ろう。そして5号石棺墓よりもさらに4号が先行する。一方、1号石棺墓は墓壙内出土土器が示す弥生時代終末期よりも後に石棺墓が構築されたと考えるべきであろう。

したがって、甕棺墓などを含めたこの墓地群は、古墳時代前期の布留式段階までのもので、布留式段階に近いものが主体を占めると推定されるが、石棺墓には弥生時代終末を前後する時期のものが含まれている可能性も高いと言えよう。

今回の調査では、弥生時代早期から前期末の支石墓を含む墓地群の南側で、弥生時代終末から古墳時代前期の墓地群を確認できたことと、その時期の甕棺墓・石棺墓とともに標石が存在する事実を確認したことが、成果としてあげられる。

なお、簡易水道工事に伴って出土した遺物では、県道福岡志摩前原線部分の新町集落中心部からの出土資料で、弥生時代終末の甕棺墓の存在が明らかであり、砂丘の高まりがみとめられる地域は、新町遺跡の遺構分布の上で注目しなければならない。

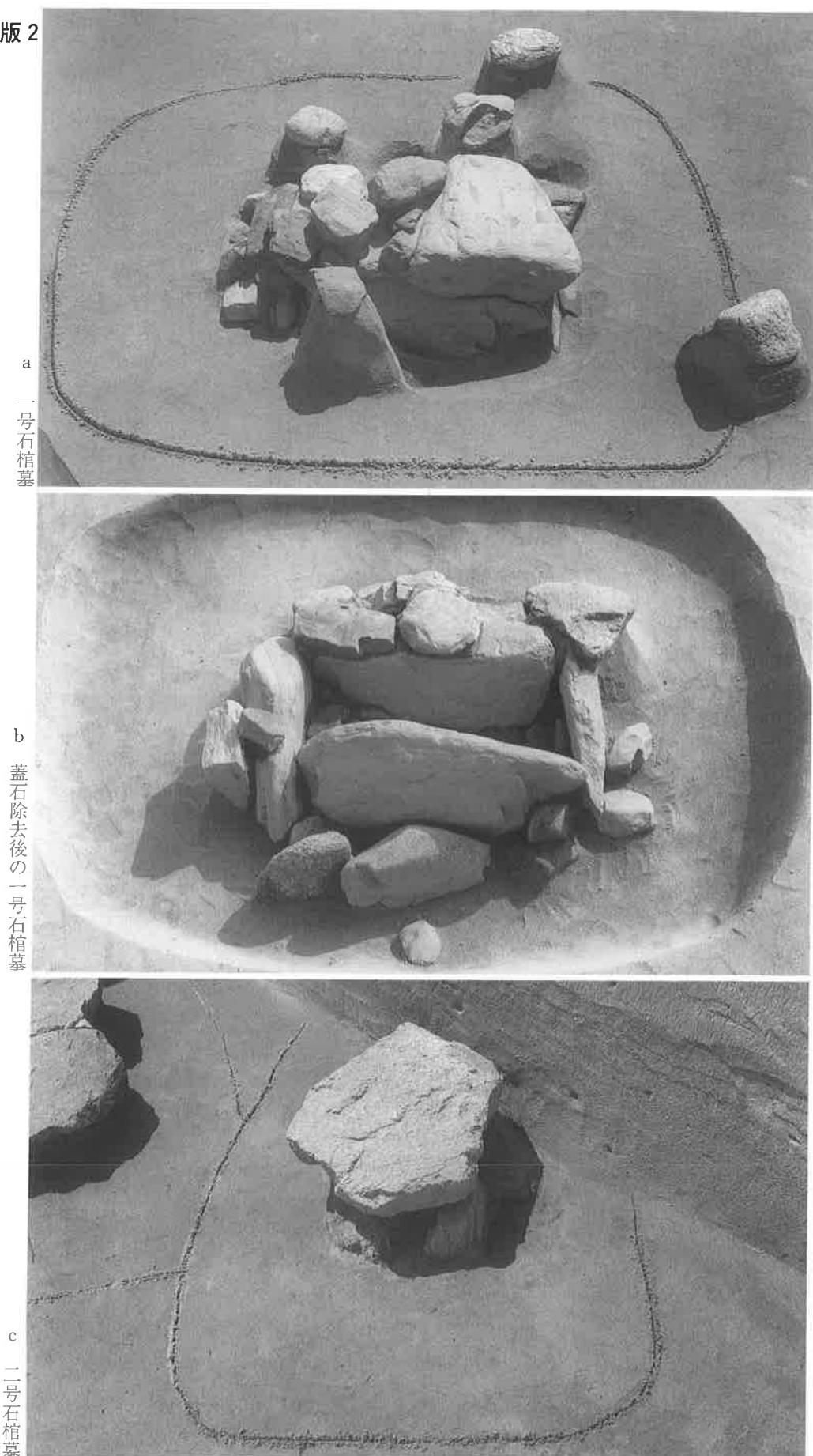
註1 橋口達也編 1987 新町遺跡 志摩町文化財調査報告書 第7集

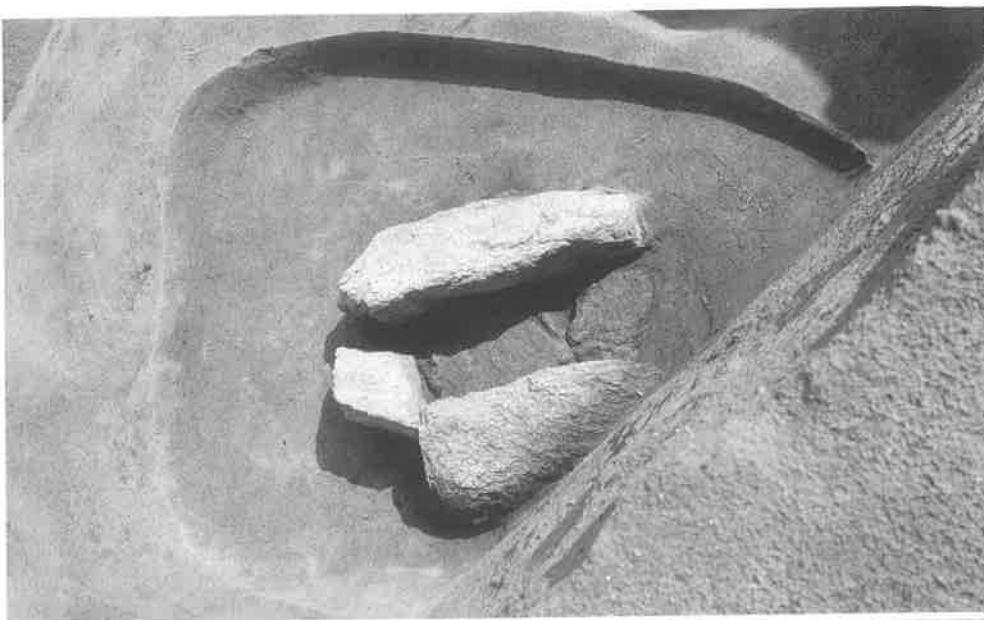
図版



a. 新町遺跡俯瞰 (西側より引津湖を望む) b. III-1 地点全景空中写真

図版2

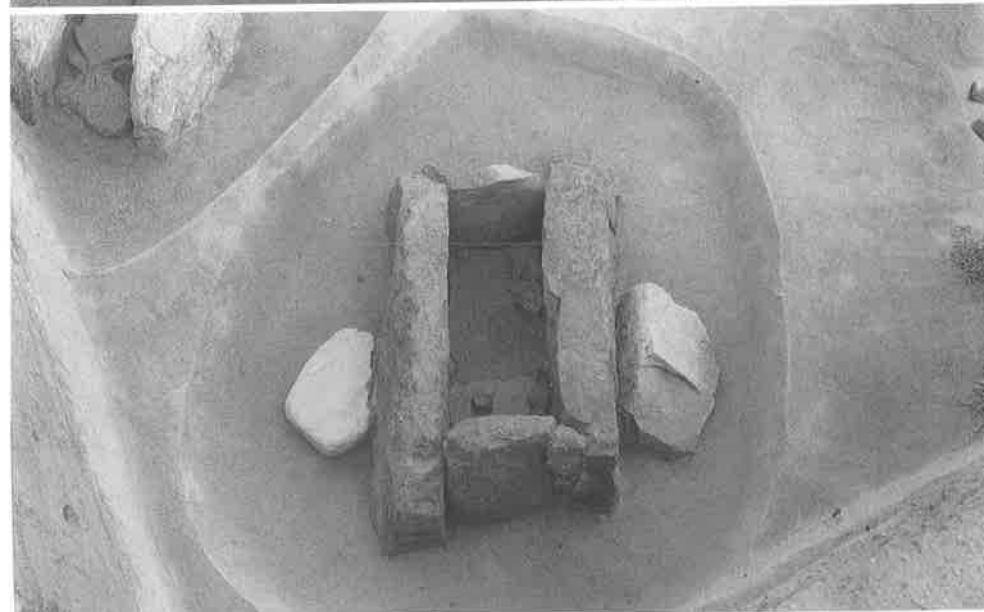




a 蓋石除去後の二号石棺墓

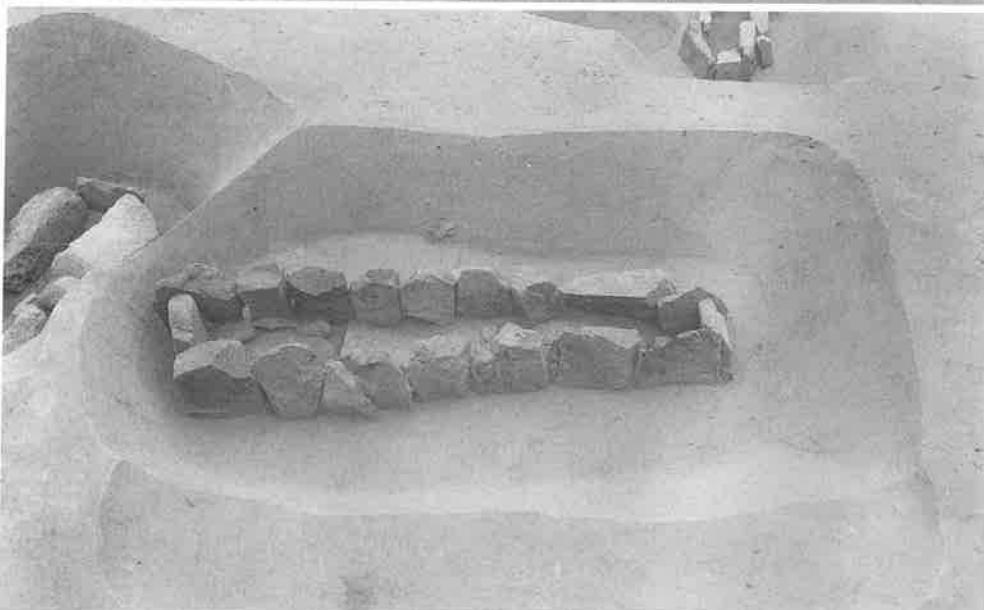


b 三号石棺墓

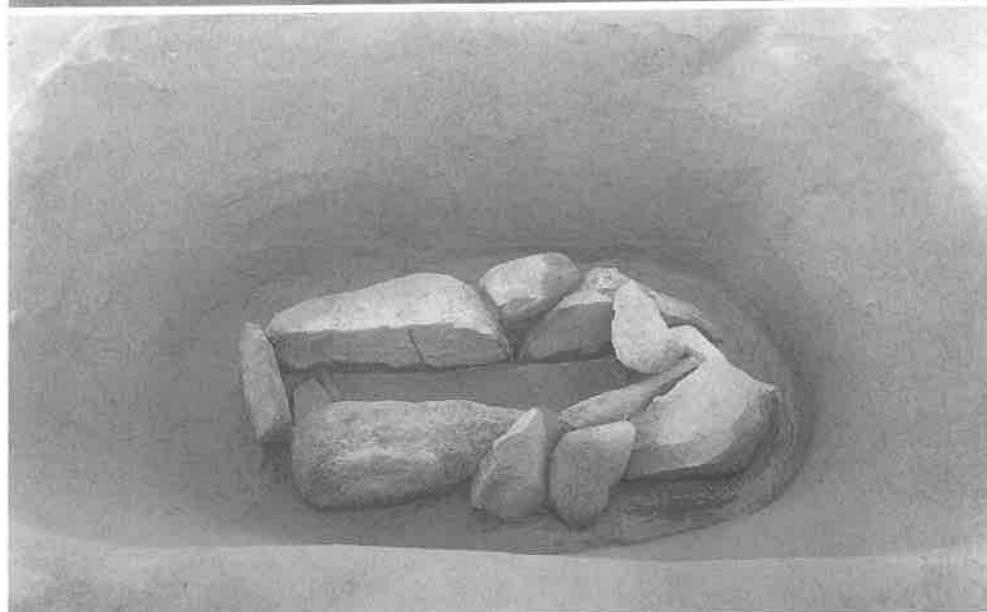
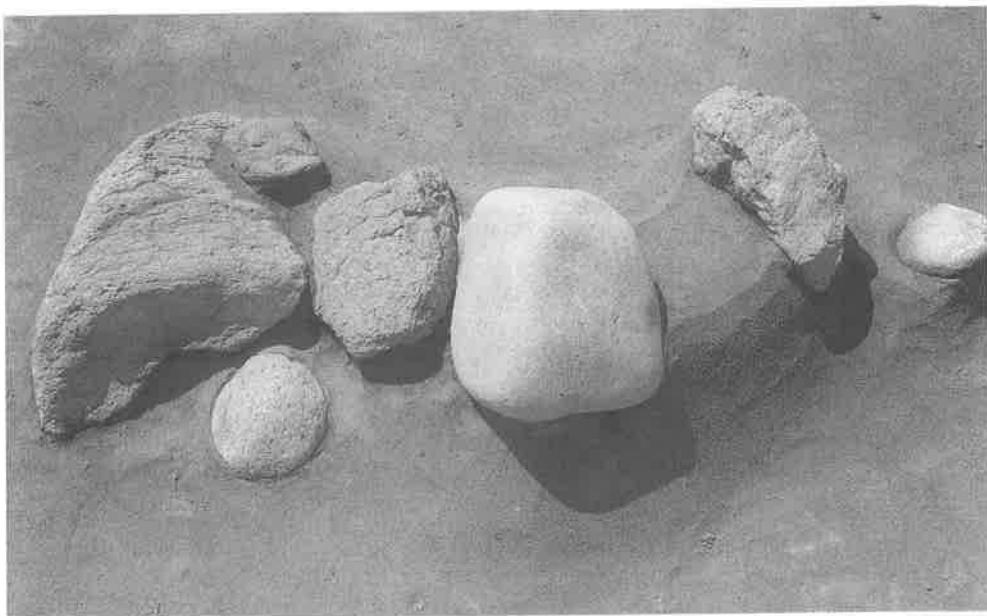


c 蓋石除去後の三号石棺墓

図版 4



図版 5



図版 6





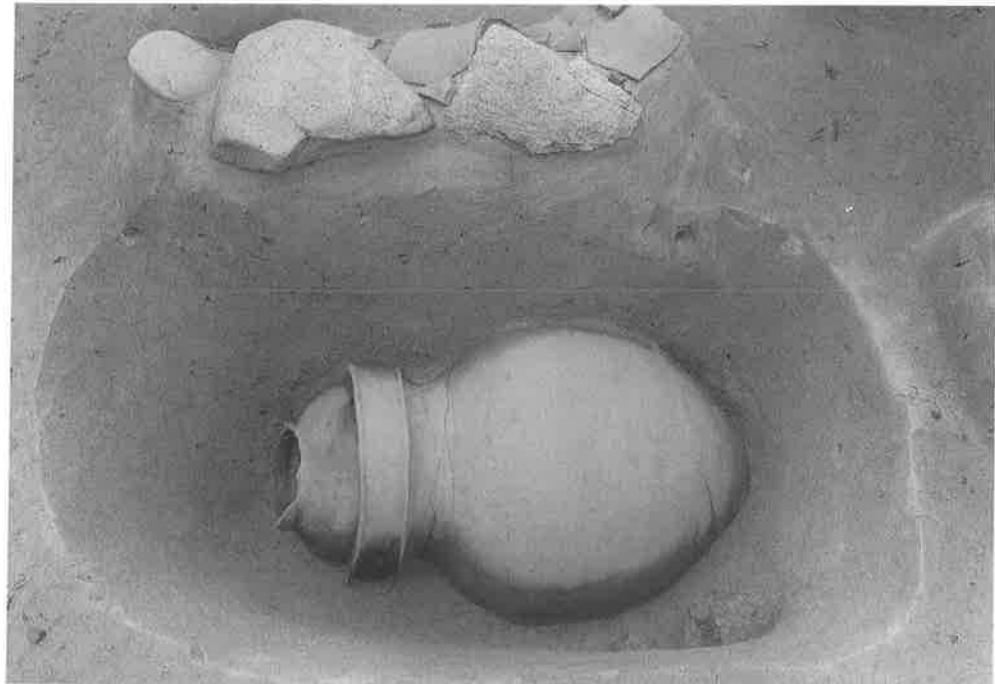
a

七号石棺墓



b

蓋石除去後の七号石棺墓

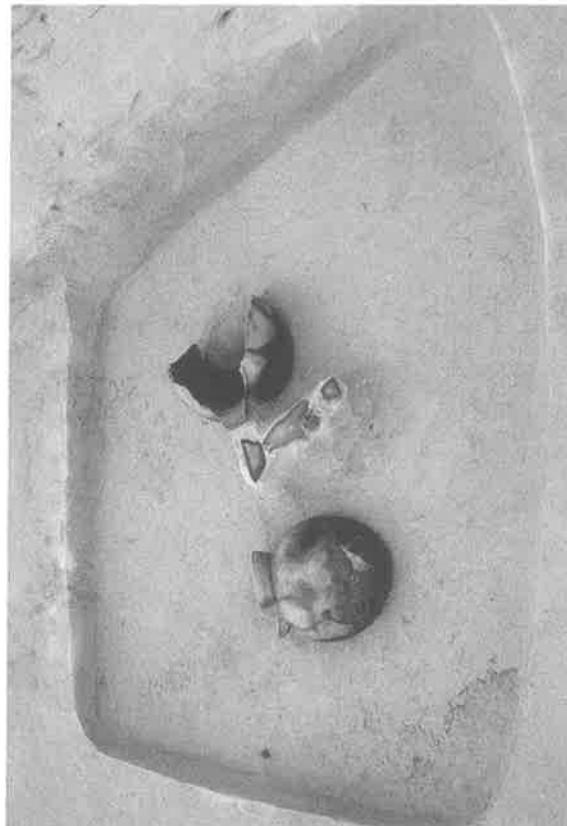


c

一号石蓋棺墓

図版 8

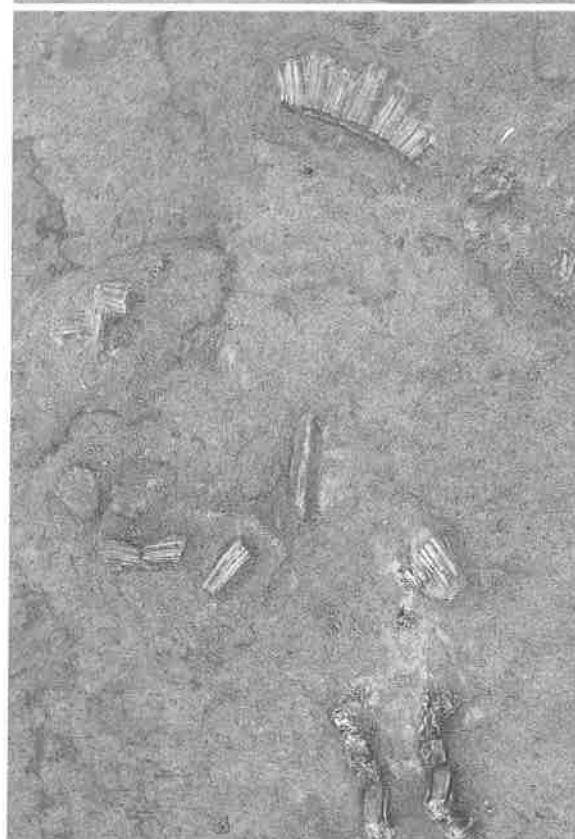
c 四号土壙



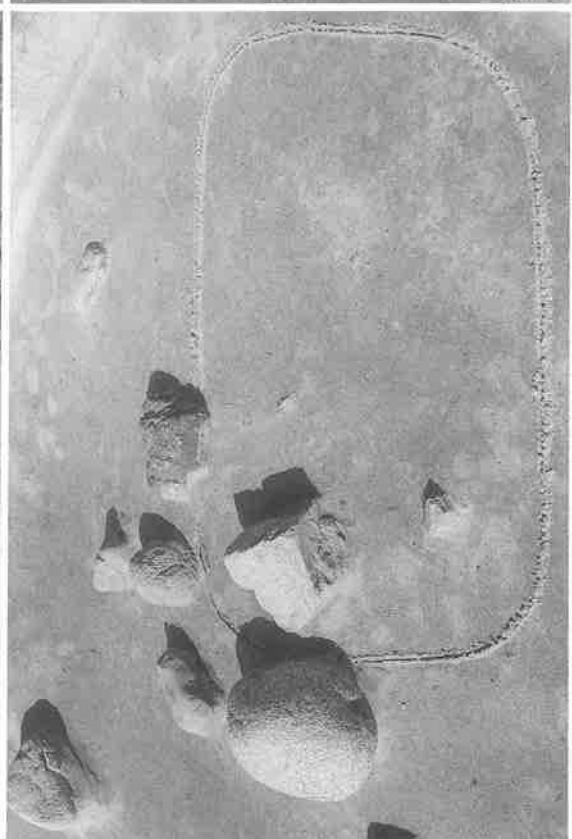
a 二号甕棺墓

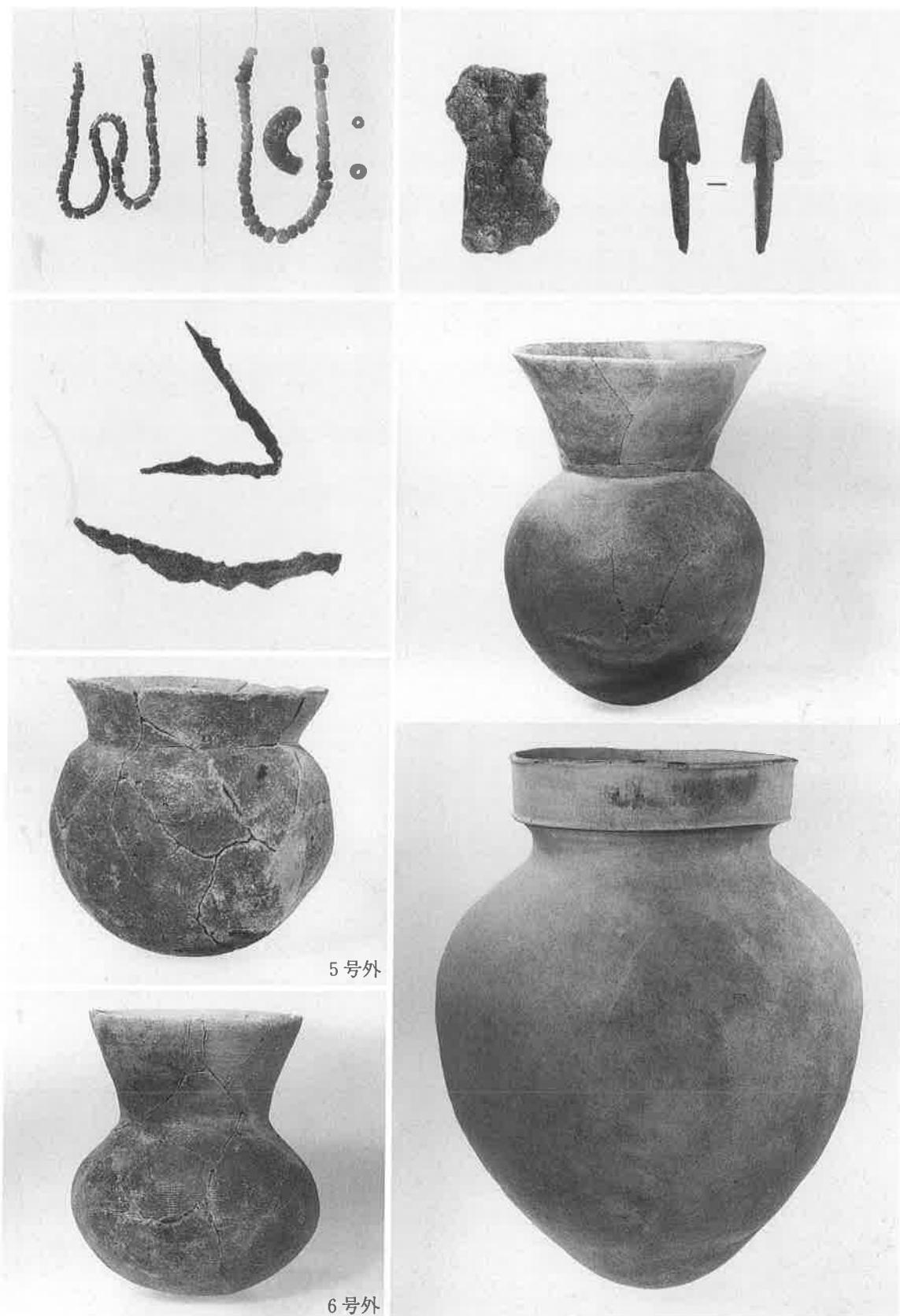


d 馬の歯牙出土状況

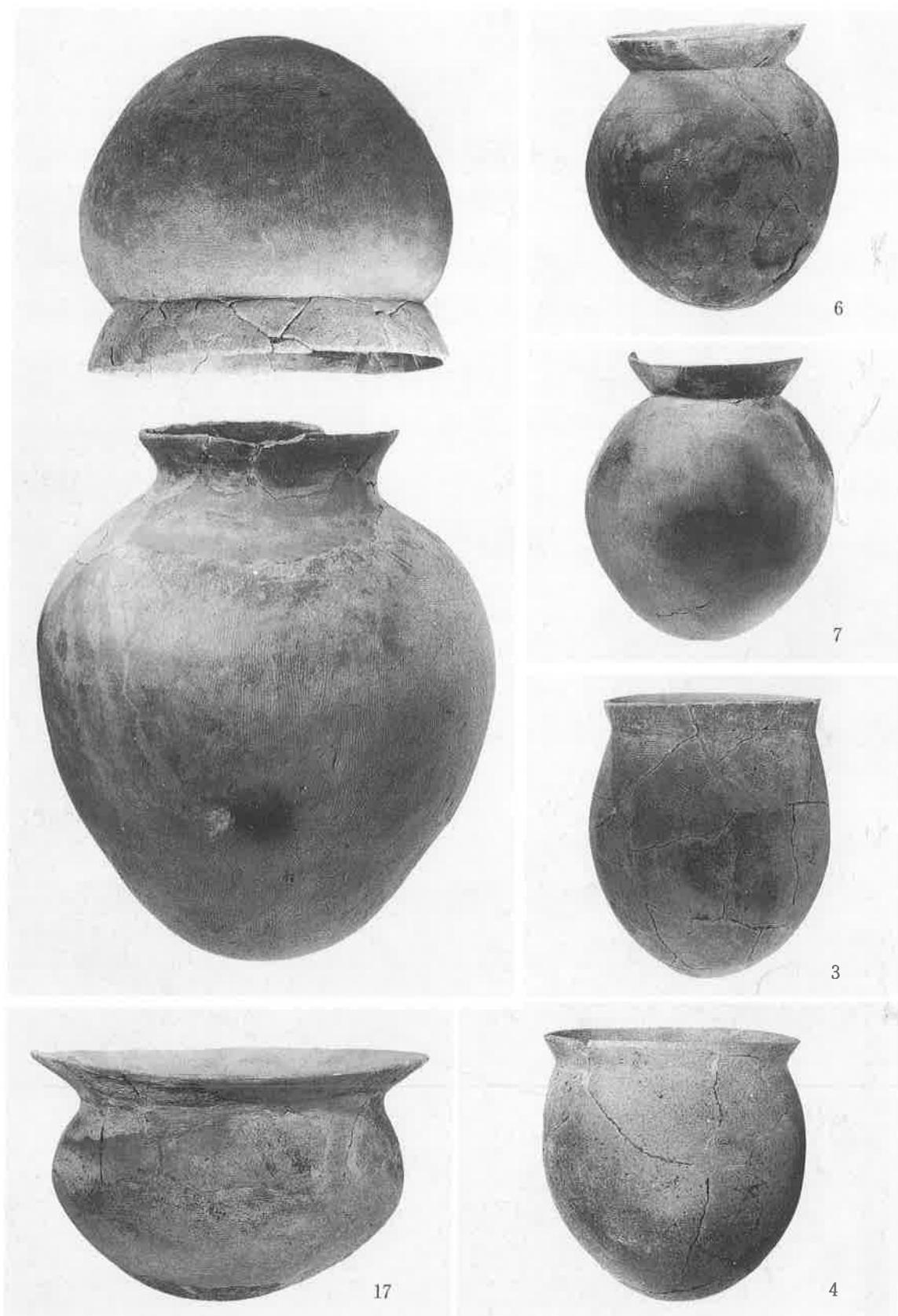


b 三号土壙

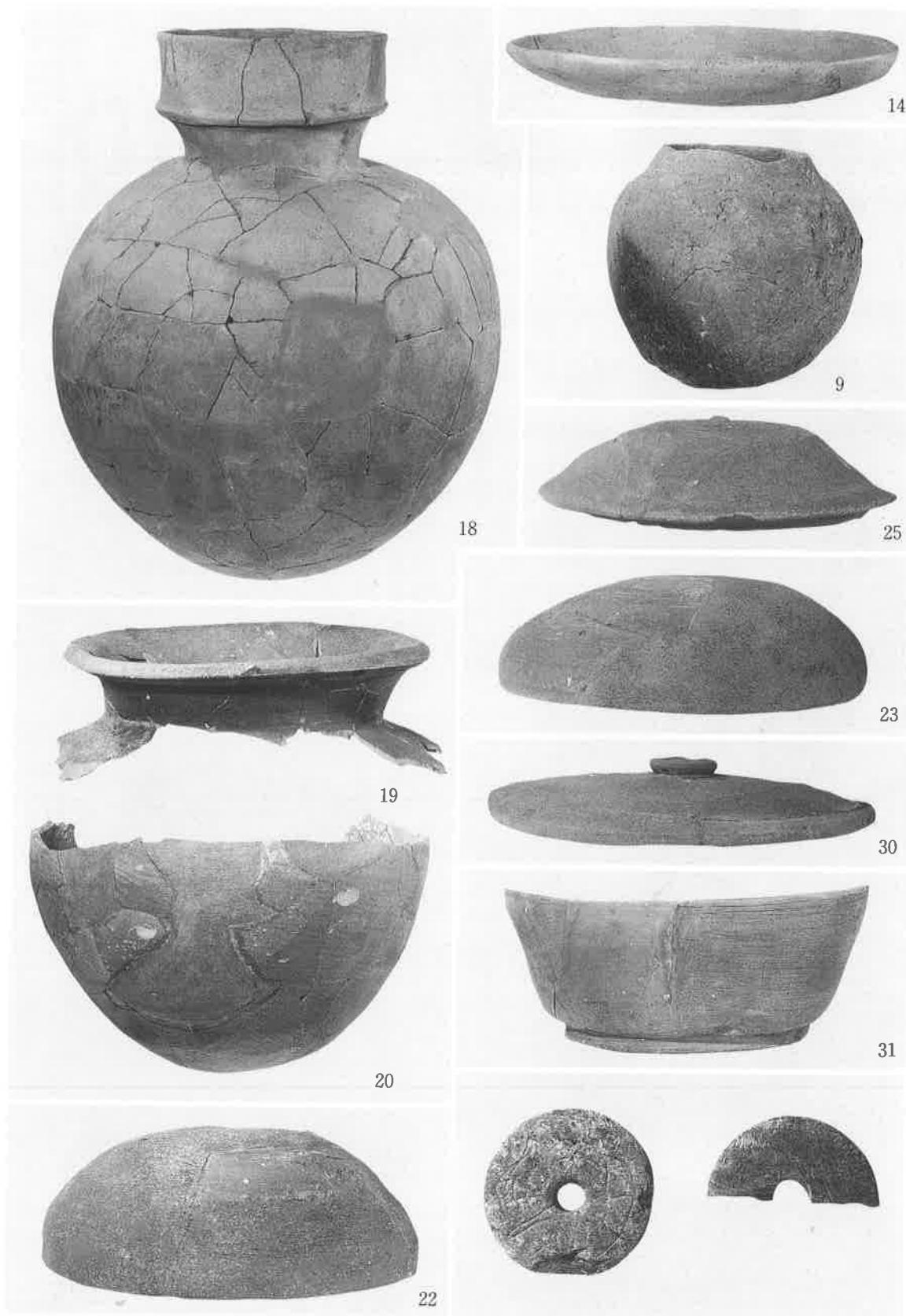




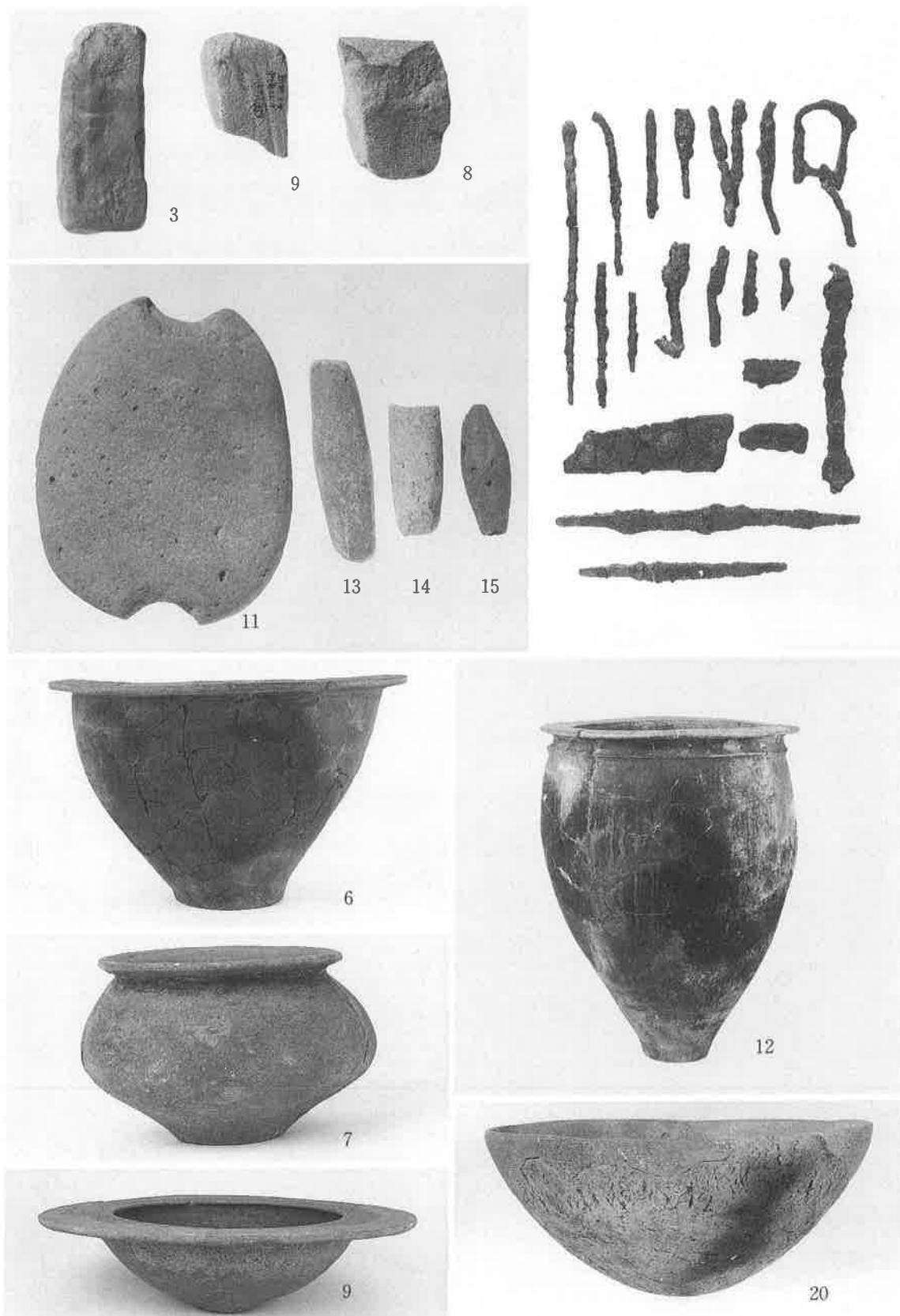
石棺墓、甕棺墓出土遺物、1号甕棺



2号甕棺、包含層出土土器



図版12



包含層出土石器・土製品・鉄器・簡易水道工事出土土器

新町遺跡Ⅲ

志摩町文化財調査報告書
第10集

平成2年3月31日

発行 志摩町教育委員会
福岡県糸島郡志摩町大字初30
印刷 隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畠田町1-1

